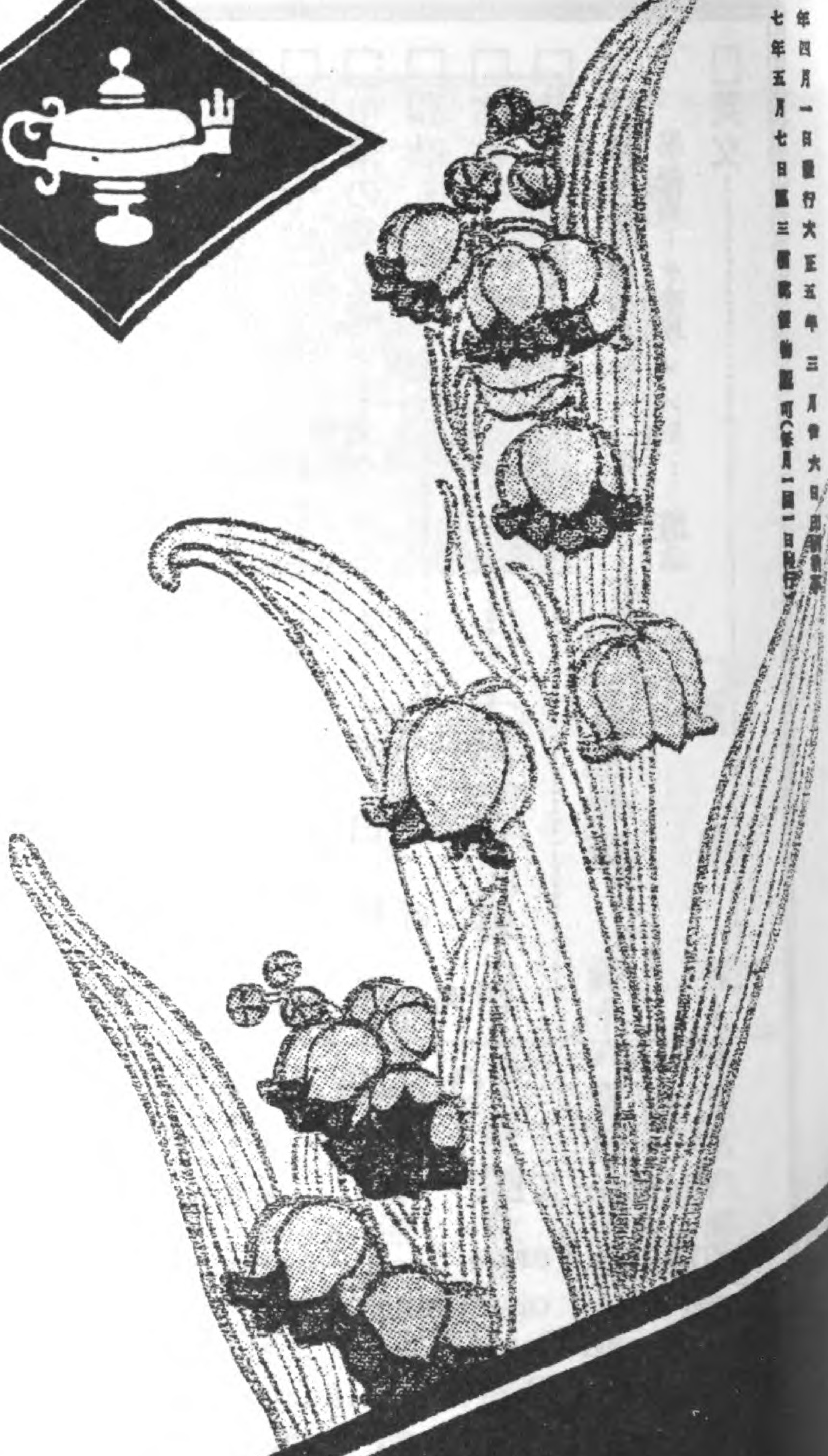
大正五年四月一日發行　大正五年三月廿六日印刷納本
明治卅七年五月七日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）

女子青年界



第十三巻
第四號

要目

女子青年會第十三巻第四號

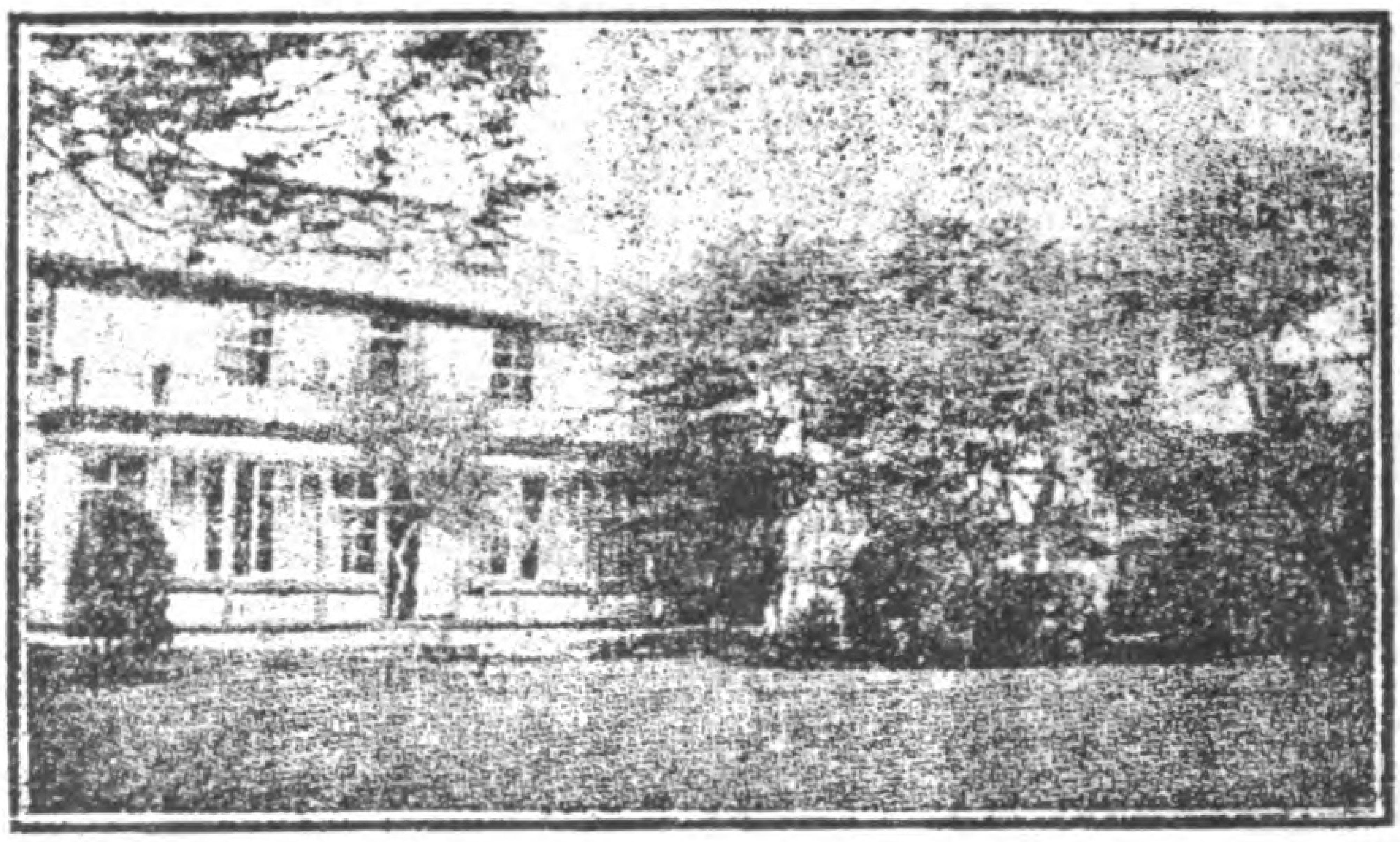
目次

YOUNG WOMEN OF JAPAN

(JOSHI SEINEN KAI)

Volume XIII　　April, 1916　　Number 4

横濱山手



二百九番

□**目的**　婦人傳道者の養成。

□**入學資格**　満十八歳以上の婦人にして高等女學校卒業（三ヶ年以上の程度）の學力を有し所屬教會主任者の推薦に係り信仰堅實體優良にして將來實施傳道に適する者。

□**修業年限**　三個年、其前に半ヶ年の考査期あり、通計三個年半に當る。

□**入學期**　學年は毎年十月に始まれども入學志願者は其以前四月より試驗生として在學考査を要す。

□**給費**　考査を經て本入學を許可せられし上、給費を希望する者には相當の方法あり委細は規則書を見よ。

□**規則書**　入用の向は二錢郵券送らるゝべし。

共立女子神學校

AMERICAN BIBLE SOCIETY
TELEGRAPHIC ADDRESS "BIBLES YOKOHAMA"

懸賞問題 ―第二回―

弊社先頃聖書研究の一助にもと存じ主に在る全國諸兄姉に向て懸賞答案募集仕候處望外の御賛成を得たる次第は其の結果を發表し社員一同感謝致し居候就ては今回聖書印刷上の誤謬なき樣致し度き考へにて弊社出版の聖書のうち活字の誤植(振り假名をも含む)或は誤植と思はるゝ樣な處の御通報を募ることに致し候何卒今回も前回に倍して御賛成被成下續々御答案を賜り度奉願上候

御答案は左の樣に(可相成は新しき版の聖書に就て乞御覽)

舊新約全書何年何月何日版縱何寸何分橫何寸何分(曲尺)

新約全書何年何月何日版縱何寸何分橫何寸何分(同)

	誤	正
(1) 何書或は何傳何頁何行何章何節	何……	何……
(2)……		……

而して最も忠實に列擧なし下され候御方へは前同樣の賞品進呈致し度く候

第一等賞	舊新約全書	インデアペーパー特製一枚折皮金緣 貳圓五拾錢
第二等賞	舊新約全書	上製折皮金緣 貳圓拾錢
第三等賞	舊新約全書	上製絲皮金緣 壹圓六拾錢

締切―四月三十日附の御郵送に限る

宛名―米國聖書會社懸賞係

横濱市山下町五十三番

米國聖書會社

懸賞掛

半襟は婦人裝飾の生命

廉價にして瀟洒なる半襟
華麗にして高尙なる半襟
優雅にして質實なる半襟
嶄新にして奇拔なる半襟

すべて新流行の粹を取揃置申候

其外

帶揚。腰帶。帶しめ。羽織紐

等流行格好品數々

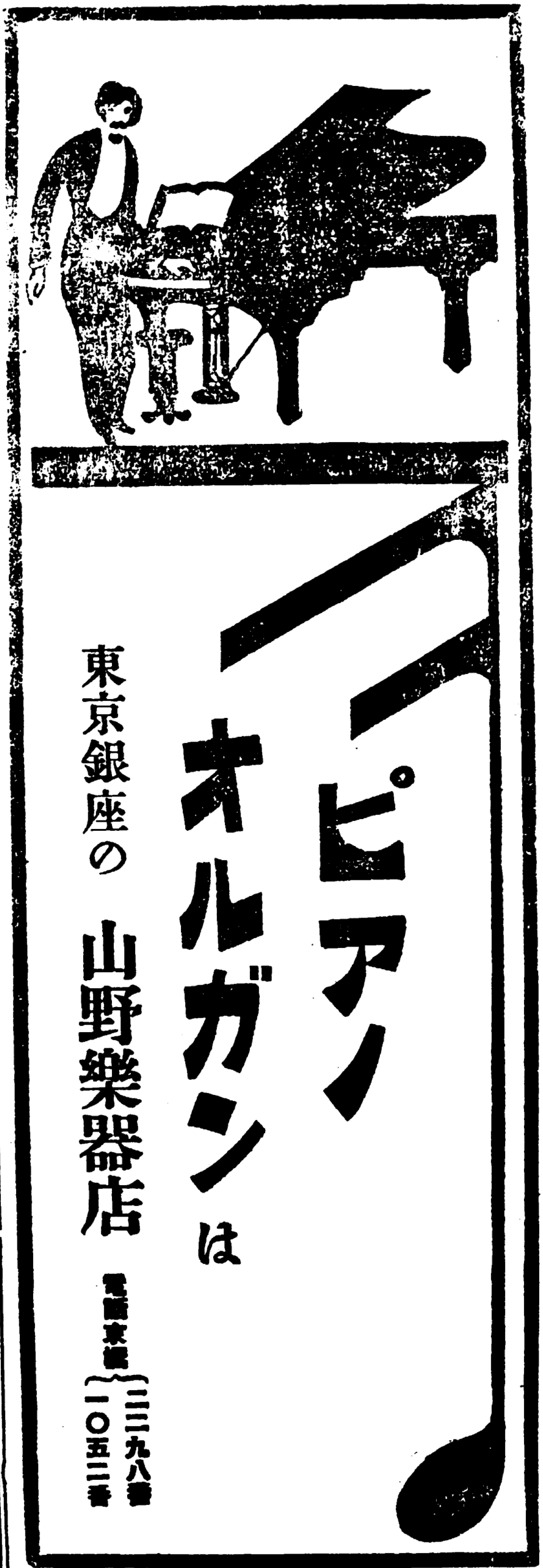
尙基督教女子青年會員の方々に對しては特に御便宜を圖り可申候

神田一ッ橋通

一京商店

東京女子青年會員 代表者 石井滋世

地方より御注文の節は御年齡及御望の色合模樣柄行等御申添御送金下され候へば弊店にて御見計の上早速御送品可申上候



隣の廣告を見よ

新しき生命

爾曹は死しものにて其の生命はキリストと共に神の中にかくれたる也。 哥羅西書三ノ三

我儕罪に於て死しものなるに何でなほ其の中に於て生きんや。 羅馬書六ノ二

我キリストと共に十字架につけられたり最早我生けるにならずキリスト我に在つて生けるなり、今我肉體に在つて生けるは我を愛し我がために己を捨てしもの即ち神の子を信ずるによりて生ける也。 加拉太書二ノ二〇

其のすべての人に代りて死しは生けるものをして以後己が爲ならで己に代りて死に甦りしものゝ爲に世を過さしめんとて也。 哥林多後書五ノ一五

是故に人キリストに在る時は新に造られたるもの也舊は去りて、皆新しくなる也。 哥林多後書二ノ一七

我儕眞理者に在り即ちイエスキリストに在り。 約翰一書五ノ二〇

こは皆一にならん爲なり父よ爾我に在り我亦汝に在る斯くの如く彼儕も我儕に在りて一にならんため也。 約翰傳一七ノ二一

爾曹はキリストの體にして亦各其の肢也。 哥林多前書一二ノ二七

我生くれば爾曹も生きん。 約翰傳一四ノ一九

勝を得るものには我藏しあるマナを與へん亦白き石の上に新しき名を記してこれに與へんこれを受くる者の外に此の名を知るものなし。 約翰默示錄二ノ一七

會説

卒業か始業か

三谷民子

此頃は何處にも、中學校なり高等女學校なりの卒業生の出ると云ふ家庭が澤山ある事と思ひます、又學校もそれ〳〵卒業式や新入學等のために忙しく、又卒業生の將來等に關して考への深き時となりました。

一體此の卒業と云ふ文字は、今迄勉強した其程度の課程を終ると云ふ意味であつて、凡ての學問の社會から卒業したと以ふ意味ではないと云ふ事が其心に徹底して居ないものが多い。就中高等女學校の卒業生にはこの種の人が最も多いやうに思はれます。これは其卒業生の內に此高等女學校が、教育の最後の幕となる者が多くて、卒業と同時に實社會に出ると云ふ觀念があるために、前に云つたやうに高等女學校を卒業すれば、既に凡ての學業を卒へて學問の社會の繫累を離れると云ふ氣になる傾向があるのであります。しかし之は大いに誤つた考へであります。英米などでは卒業式の事を Commencement と申します。此の意義を考へて見ますと是は卒業でなく、つまり始業と云ふ事であります。日本で卒業式と云へば、既に出來上つたと云ふ意味の名稱であるに反し、英米では更に之からより高いものを始めると云ふ名稱が附されて居ります。此名稱の與へる印象の結果とも思はれますが、一方に卒業生の人物が若かやいで、元氣にみちて居ると同時に他方には老成し

ておさまり切つて居ると云ふ感があります。私は日本の學生も矢張りかういふやうにありたいと思ふので御座います。單に高等女學校の卒業生のみと申しません。あらゆる高等專問學校の卒業生の方々でもこの Commencement の意義を以て世に立たれる事を希望するものであります。

人は其眞價の如何に拘らず、兎角容易な事を喜ぶもので、成る可く困難複雜な事は避けたいと云ふ傾向があります。其れがため各自が其の職を撰ぶにも出來得べくば繁華な東京に止まつて、地方に行く事を好まないものが多いのであります。然し私共の手を待つ事は、敎育を受けた人々の手を望んで居る處は、東京よりも地方の方が多いのではありますまいか。卒業生の大多數は都會の人ではありません。槪ね地方よりの人々であります。其人達が地方を出る時には都會に出て大に勉强して、天晴錦を着て故鄕に歸り、其地方のために一臂の力を添へたいと決心したのであります、それが三年五年と都會の空氣を呼吸した後は、それに醉はされて、他に利益を與へんと云ふよりも、自己の安逸、名譽のために地方へは歸りたくないと云ふ人が、夥しいようでありますが如何でせうか。

凡そ職業を撰擇するには、之れが一番自分に適して居り且、社會に必要なものであるからとの確信をもつて撰擇したいものであります。之れが一番自分に勝手であるから、收入が多くて金儲が出來るからと云ふ如き標準に依りたくないものであります。苟も其職業を社會にとつて必要であるからとして撰擇する以上は、たとひこれに從事するならば、時には氣に染まない事もあり、或は困難なる事もありませう、又自分にとつて不勝手な事もありませう。然しその難しい事、不勝手な事をおし切り克己してこれに當る所に、敎育の眞價が現はれるのではないでせうか。

兎も角、勇氣と元氣がなくてはなりません。堅忍不屈の精神が必要であります。此際卒業ではあるが

始業の心持とをもつて、世の中に突進する青年男女の多からん事は誠に望ましい事であります。

基督教女子青年會の活動及其機關（四）

社交部委員の事

（一）目的

神が我々をこの世界の中に置き給ふ時、神は我々が社交的動物たらん事を望み給ふ。即ち他の人々と共に生活し、吾々の生涯が他人の生涯に關係あらしめん事を欲し給ふ。

吾々の家族は一つの社交的單位なり、其内に人々が他人と深き關係を有して生存しうる最少の一團體なり。これ以上の大なる社交的團體は町村なり、都市なり、國家なり。五六世紀以前には、數人の宗教家等が神は彼等が神聖なる生涯を送らんため、この世俗的世界より離れて生活せん事を望み給ふものなりと信ぜし事ありき。併し我々はキリストの御生涯と其教とを研究するにより、神の御心を行ふべき方法は人々の中に生活し、且吾等の家族、近隣又は其都市をして、其の内に生活し神に奉仕するに最も清潔なる又美しき所となさしめんと力むるにある事を益々深く學びつゝあるものなり。神を愛し、これに仕ふるの最上法は清く人々を愛し之に仕ふる事なり。

而して社交なるこの文學の意義は、我が青年會一委員の名稱なり、吾々は單に此の部をして娯樂的集會を司どるべき委員なりと考へ居たりき。吾々が此社交なる文字の意味を熟考する時は、如何にこれが該部委員の意味を變化せしむるものなるかに思ひ到らざるを得ず、即ちこは單に青年會に屬せる全學生のみならず、全學校に於ける共有的生活に係さはるべきものなり。由りて社交部委員の肝要なる職務は全體としての學校及個々の學生のため學校生活をよ

り善くし、より正しきものとなすにあり。凡て學生は皆其朋友を要するものなり。而して同部委員の務の大切なる一部は友人たるべく、且普く學校內に友情及親密なる朋友的關係を養ひ、これを助長せしむる事なり。この第一の目的を完全するの方法は、委員によりて實際に顯はされ且助長せられたる友誼の精神によるものなり。

靑年會の目的は完全なる婦人、卽ち肉體上、智識上、精神上、社交上の四方面に缺げたる處なき婦人を養成する事なり。若し諸姉が女子靑年會々則を一讀せらるるならば下の如き目的を見出さるゝならん。

「本會の目的は會員相互の間に基督敎的性格を涵養し、知識、社交、體育の發達を企り、一般靑年女子の間に基督を普及し、且彼等を導き耶蘇基督を救主として信ぜしむるに在り。」

人は社交的基督信者、卽ち友情厚き信者にあらずして、眞の基督敎信者たるを得ず、若し女子靑年會にして其中に友情なく、軋轢絶えざるものは誠にクリスト敎的たるを得ず。此れと同樣に一國民も又其隣人卽ち他國民に對して友愛の情なく爭鬪絶へざる時は、眞にキリスト敎國民と云ふを得ざるなり。夫がため社交部委員の目的は宗敎部集會委員、聖書研究部委員等の目的と同樣に深奧にして眞面目なるべきものなり。同部委員は學校內の全學生をしてイエスキリストを知らしめ、これを愛するに至らしむるやう敎導せん事を最も眞率に希望すべし。此結果を來たさんための働きの方法は『友情』てふ一道路によるべし。友誼厚き精神は其働きの全部を貫徹すべきものなり。

(二)職務

同部委員の活動は新學年の初頭に於て開始せらるべきものとす。

(イ)同部委員は先づ新入生の到着せんとする際、彼等の出迎へ及これが案内等を手傳ひ得るやう、用意周到たるべし、委員は新入學生の到着以前に於て

彼等に歡迎の手紙を認むるやうとの依賴を受くる事もあるべし。又新學生入學の後、委員は彼等を其場所、或は其部屋に導き、是等を教へ、又は其教科書の書名を知らしめこれを買ひ與うる等、其他未だ全く學校に不馴れなる學生にとりて必要なる一切の事を教へ、助くるを持つて其端緒となすべし。

(ロ)始業後第一週或は第二週に於て、勿論新入生のため最初の集合として大歡迎會開催し全校生徒を招待すべし。尙其學年間、特に始めの月に於て、屢々小集會を開き、四角ばりたる親睦會としてにあらず單に打ちくつろぎて親睦を企るの時として、學生等を招き、各々其裁縫、編物などを持ち來らしめ、上下級の區別なく皆伴に座して談笑し、あるひは其間一人のもの興味深き書物或は新聞紙を朗讀し、後皆其讀みし事につきて論をたゝかはす等は、誠に好ましき計畫なり。才智に富める社交部委員はこの他尙多數の斯くの如き打くつろげる集會の興味あるものを考出すべし。これに關しては多數の金を費すの必要なし。金錢は穿ち、學生等をして、其家庭にあるが如く氣兼ねなき溫かき感を與へ、若しくは其周圍に眞の朋友を有するの感じを起さしむるものにはあらず。斯くの如き小集會には、出來得る限り多數の上級生に依賴して、其助力を仰ぐべし。新入生をして其心より眞實なる朋友を有するの感を起さしむる唯一の實際的方法は、學生聖書研究の組の指導者(學生たるべし)が單に彼れ等が聖書を教ゆる其時間に於てのみならず、常に己が組に屬する學生に對し、個人的責任を帶びて、これを導くにあり。

(ハ)又同社交部委員の努力は通學、寄宿舍兩學生間の親密を計る上に於て大いに價値あり、且必要とする處なり。寄宿舍生に取りては、靑年會が彼れ等に屬せるものなる事を感ずるに容易なるも、通學生にとりては、寄宿舍生同樣に、已がものたるの感を有する事難し。且通學生は概して寄宿舍生よりも尙含羞みて、且寂しき心持ちを有するものなり、依りて此處に友情に關するキリストの精神を到達せし

むる最良の機會あり。而して病める學生を見舞ひ或は草花を贈る等は其一手段たるべし。

(ニ)大切なる職務の一つは、宗教的集會の時に於ての事なり。若し薄暗く、冷やかにして且陰欝なる室内に入り、嚴粛なる集會の間に座し、此れがため恰かも悲哀なる葬儀に列せしが如き感を起さしむる時は如何? これキリスト教的集會の示すべき光景なるか、又與ふべき印象なるか? 由りて云ふまでもなく其開催さるゝ都度、此集會をして、全學校生活に於ける、最も愉快なる、最も心神を快活ならしむるの時となすは、社交部委員の双肩に懸かれる責務なり、司會者の卓上に草花を挿し、會場に於ける空氣の流通に配慮し、或は該部委員の一二人を集會以前に出席せしめて、來會の學生を歡迎せしめ、又は委員等が、來會を躊躇せるが如く見ゆる學生を個人的に招待し、勸誘なし居るか等に注意すべし。溫かき心情と厚誼の充ちたる空氣は來會者の學生等をして、キリスト教的生活に關する討議にも熱心に傾聽し且共に禮拜するに容易ならしむるものなり。

(ホ)尚社交部委員の職務の一つは、始めに述べたる如く學生生活の標準を高からしむるやう助くる事なり。諸姉の學校社會に於ける、最大なる缺陷は何なるか? 諸姉は委員の一人として、此缺陷を如何に補ひ、其惡風を如何にして驅除し得るか? 諸姉の教室に於ての正直の標準は如何? 又金錢浪費の習慣は如何。委員諸姉にしてより以上に嚴酷なる正直に加擔し、金錢の節約、衣服の質素等を唱道し得ざるか。諸姉は食事中或は休憩時間に於て如何なる談話を好みて爲すか。恐らくは雜談若しくは空論なるべし。諸姉は此際他の新らしき話題、即ち世界の大勢、若しくは一都市の狀態、其處に起れる問題等凡て、吾々をしてなほ以上に豐富なる智識を有する婦人とし、且其友人に對してより親切なる者となすに足る話題を持ち來るによりて、斯くの如き有害無益なる談話の惡習を矯正する事を得らるべし。尚其他諸姉は學校の全社交的標準を高調せしめ、又キリ

スト教的團體の親しき家庭的空氣の內に凡ての學生を集め、且多くの學生をして、彼等が此處にてキリスト教的大氣に觸れし經驗により眞のキリスト教的生活を營み、其奉仕に與かるに至るやう、これを助くべき多くの方法を見出す事を得べし。

此等の事困難にして或は不可能なるが如くに見ゆれ共、神と共なる時は如何なる事も成就しえらるゝ事、及諸姉の切實なる祈禱に比例して、諸姉は其靑年會、學校及主のためによりよき事を成就し得る事を記憶せらるべし。

主は我が友　われ主のもの
あだはかこむとも
いかでおそれん
我がこゝろは　憂をすて
わらひたのしみて
うたひをどる

稟告

今月は既に各學校卒業期と相成り在各學校會員愛姉方の中には目出度卒業の上故郷に錦を飾り又高等の學業を修めらるゝ方も少なからずと存候へ共今後も本會との關係は變らざる樣相願度自然學校靑年會との關係の絕ゆる場合には是非本部の會友（本部直接の會員）となり本會のため一層の御援助を與へられんことを希望仕候間何卒其旨御申越下され度願上候

大正五年三月

東京市神田區北神保町十四番地

日本基督教女子靑年會本部

十字架上の七言

牧師　植村正久

「ペテロ及ゼベダイの二人の子を携へ憂へ哀みを催し、彼等に曰ひけるは我心いたく憂へて死ぬばかり也、こゝに待つて我と偕に目を醒しをれ、少し進み往てひれふし祈りいひけれは、吾父よ若しかなはゞ此杯を我より離ち給へ、然れど我心の從を成さんとするに非ず、聖旨に任せ給へ。」（馬太傳二十六〇三十七―三十九）

一晝の十二時より三時に至るまで其地普く黒暗となる三時ごろイエス大聲になり、エリ、ラマサバクタニと呼はりぬ、之を譯けば吾神わが神なんぞ我を遺たもふやと云へる也。」（馬太傳二十七〇四十五、四十六）

右の數句はエスのゲッセマネの祈りと、十字架の上から、『何ぞ我神われを捨て給ふや』と呼はりし事を記せしもので、ゲッセマネの祈りから、續いて耶蘇の口から出た七つの言葉を考へるわけである。此所に耶蘇がゲッセマネの園に入らんとした時、先づ弟子の内八人を或る處に殘し置き、他の三人のみを連れて、或る所まで行き、又此處に其三人を置き、自分はこれを引き離れ、少し進みて一人で祈禱をなされた、これは一體如何なる理由であるか、これについては種々解釋があるであらうが、多分如何にしても耶蘇の心情が弟子達には解し得られない、到底一所に祈禱するわけに行かない、それ故耶蘇に取つては、共に祈りたい、他人の同情を求むる事は切である、決して孤立する事は耶蘇の望まるゝ處ではなかつたが、然し如何にしても弟子と共に同じ心を持つて神の前に祈禱する事が出來ない、それ程耶蘇と弟子の心とが相違して居つた。それがため止むを得ず一人で祈られたのである。人は偉くなり、神と近くなればなるほど寂しくなる、何事にても人と共にする事は出來なくなる。今耶蘇の境遇はさうである如何にしても其心中が他の者には解し得られない。

心を合せて祈禱するわけに行かない。これがために耶蘇は唯一人進み行きて祈禱せられたのである。此時耶蘇の様子を深く考へれば、非常な煩悶で憂に沈んで居られた。殆ど勢力の抜けた如く、全く弱り込んで居られた。何故耶蘇がかくの如く煩悶し、意氣沮喪して居られたか、之に關しても又種々の異つた說明をなす人がある。就中耶蘇が死を怖れた故であると云ふ者もあるが之は實に其誤謬の甚だしきものである。耶蘇が其終りに於て無惨な死を遂げらるゝ事は耶蘇自身の豫てよりの覺悟であつた。然らば耶蘇がかくの如く喪心自失ずる筈はないではないか。されば何故に耶蘇が斯く煩悶せしか、と云ふに勿論我々が耶蘇の心中を委しく索ぐる事は出來ない。我々の淺薄なる考をもつて耶蘇の偉大なる心を推測する事は不可能である。然し其心中の片端なりとも知りたいと窺へば、其時耶蘇の胸中には人類の罪惡の爲に今將に耶蘇が死なんとして居らる、其罪の重荷を感んずる事が實に激烈になつて來た事が解せらるゝのである。而して罪を感ずる者が、神の聖顏を見上ぐる事が出來ない。神と隔離したと云ふ意識が迫つて來る。即ちキリストが人を愛する處――是に同情を持つて居らるゝ事が深い處から、眞實に自身を世の罪ある者と同一にせられた。それがため暫くの間耶蘇の心持では神の聖顏が雲隱れしたかの如くに感じ、是迄に經驗した事のない神との隔離を經驗した。それは皆人の罪のためである。人と自らを一つにせるためである。今は斯くの如く神と自かの間に隔離を生じ暫時其聖手に縋ると云ふ經驗が消え失せる場合である。實にこれは堪へ難き事、忍び難き事であると感んじて居られたからである事が、解せられる。勿論身を犧牲にして人を救ふ事は覺悟の前の事であるが、併し今申すやうな、最も辛い苦い經驗卽ち神と隔離すると云ふ經驗を嘗めなければならぬ。斯る經驗を嘗めずして、自分の身を供物とする事は出來ぬものか、果して之が耶蘇の死に對して缺くべからざる要素であるか。この問題に對して未だ

明瞭なる了解が出來ず疑の中にあつた。そして恰も黒雲が渦巻いて耶蘇の周圍を取り圍み、其魂を覆ひつゝあるが如くにして、其勢凄まじく、其有様は實に物凄いが是が果して必要止むを得ぬものか、斯る事をしなければ神の聖旨によりて死する事は出來ぬものか、これにつきて耶蘇が未だ半信半疑の中にあつたのである。若し明瞭にさうと定まれば、如何に辛き事をもこれを忍び、如何に苦き盃をも忍んで飲み終へるのであるが、未だ確に然りと見當が付き兼ねて居る。其處が肉體の苦痛、人の侮辱、愛する者と分れる事、これらは元より人情に富める愛情深き耶蘇に於ては、非常な苦痛に感じて居られた事は勿論の事であるが、併し暫時の間なりとも、神の聖顔を仰ぎて其れより出づる光と慰安とを受くる事の出來ぬやうになる事、これが何よりも最も忍ぎ難き事で、これが其の煩悶の原因であつた、實に堪えがたき、物凄い事で、如何にかして此の苦痛が無くて濟むならば、又其恐ろしい、渦巻き迫まつてをる黒雲から逃れられるものならば、逃れたいと云ふ心であつた、『若も聖旨ならばこの盃を吾より離ち給へ』と、一度も二度も同じ祈りを續けられた、又三度祈られたが、此度は其模様が變つて來た。そして先づ『此杯を飲まで離つこと能はずば聖旨に任せ給へ』そして三度斯く祈られた處が、これは神の聖旨、この渦巻ける物凄い黒雲の間を通過しなければならぬ、これが神の聖旨であると耶蘇に明らかに了解された。斯く明白に分れば、之れにても尚强情に神の意志に逆らつて何處までも抗辨して免かれしめ給へとは耶蘇は云はれない。實に神の聖旨で最も辛い事をなすが已が務めであると云ふ事が了解されし時は惠み深き愛に滿ちた神の聖旨に潔よく從ふ。耶蘇が一々其說明を知りしにあらず、唯神の聖旨である事を知つた時、この聖旨に從つて決して惡く思はない不滿の感じを起さない。此處に大決心が行はれたのである。そして其頸に繩を附けて引張られるのではない。神の聖旨なる事が解せらるれば即ち進んで行

く。其處に耶蘇の方から志を載せて自ら奮發してこれに當るといふのである。それが爲祈禱をなせし前と後とは其有樣が全然相違して居る。祈禱の以前には、『……我心いたく憂へて死ぬるばかり也……』と其の弟子に云ひ、其煩悶の有樣は目も當てられぬほどであるに引き替へて、祈禱り終りし時は『今は寢ねて休め時は近し人の子罪人の手に付されん』と云つて、實に其態度の堂々として雄々しく勇ましい有樣には一驚を禁じ得ない。今までは頭を垂れて如何にも烈しき煩悶の状態であつたが、今は頭を擧げて敵の進むを見、『起よ我儕行くべし――』と、其懸隔實に雲泥の差である。

此の事に就きて第一に記憶を願ひたい事は、耶蘇が神と隔離する事は實に辛い事であるが、此最も辛い事をも神の聖旨にして、又人類の爲であるならば決して躊躇逡巡する事なく覺悟を定めて、進んで行かるゝ事である。此の時は、耶蘇の志意に於ても稱神に於ても十字架の死を既に遂げられたと同一である。第二には耶蘇は捕縛され、幾度か公廳に於て取調べを受け、次に刑場に引かれたのであるが、この刑場に於ての言葉である。第一の言葉は『父よ彼等を赦し給へ、其爲す處を知らざるが故なり。』と云ふのであるが、これは誰のために祈禱せしか、これに關しても、種々の説明がある。或は亂暴なる兵隊共、其刑を司どる者、荒夷共の、事の次第も知らずして恐ろしき惡事を行へるを見るに見兼ねて、耶蘇が斯く祈りしものであると。又或人はユダのため、或はピラトのためユダヤ人の方伯のためにも祈つたのであると、其如何は斷定し難いが、兎も角耶蘇が人の罪惡の如何に恐ろしく如何に神の聖心を痛ましむるかを考へられた事は確かである。自らの苦痛、自からの侮辱よりも人が神の前になせる事の如何に空恐ろしき事を行つて居るか、又當人は其事が惡であるとは少しも知らず、却つて善事であると思つて居るかも知れない、かゝる事を考へた時耶蘇は神の聖旨に對して恐縮に堪えない、と云ふのが一番强い

感じであつた。何故にこの場合耶蘇が、彼の中風病みに向つて『汝の罪許されたり』と云はれし如く、斯く宣言なさらなかつたか。何故『彼れの罪赦されたり』と言はれざりしか。此處に大なる意味が含まれて居る。即ち畢竟神と人との心が解け合ふ、融和する、人が其罪を悔ひて神の前に恐れ慄くにあらざれば、其罪赦されて神の廣大なる恩寵は眞實にならない。耶蘇を殺戮せる連中は、少しも己れの犯しゝ罪惡に對し憂い懺悔し後悔する處がない。如何にしても彼等は罪の赦しを得られない者である。實に憐むべきものである。又恐ろしき事である。何卒彼れ等が神の與へ給ふ御赦しを眞に自分のものとして得るに至れかし、何卒赦さるゝやうになれかし、今の如き有様では甚だ恐ろしい、實に殘念な事である、何卒彼等が罪を悔いて眞に此の赦しを得るやうになれかしと切に耶蘇は祟み祈られたのである。依つて一方に於てはこの言葉は寛大な意味に滿ちた、慈悲深き意味を有するものなれ共、又他の一面より考へれば、此の中には實に嚴格なる意味が含有されて居る。即ち恰も彼等に向つて罪の宣告を下せしと同様である。彼等は已れの罪惡を感ぜず、悔い改むる事なきが故に、自ら進みて其の罪を悔ひ、神の前に恐れ入るにあらざれば其の罪は赦さるゝ能はざるを以つて、其罪の如何に大なるかを示してをる。併し如何に愛と同情に富みし言葉であるか、『其爲す處を知らざるが故なり』とは。第二に丁度同時に耶蘇の左右に同じ様に刑を受けて居た二人の罪人、始めの間は二人とも耶蘇に惡口雜言をなし居りしが、其の一人耶蘇の御様子、耶蘇の人柄を目撃し或は其の言を聞いて居る中に、彼れの心は變化し、神を畏れ耶蘇が慕はしく、懐かしくなつて來た。十字架の上を見ればユダヤの王と記した札が附けられて居る。彼れが以前耶蘇に逢つたか又は聞いた事があつたかは判然しないが、併し耶蘇の噂位ひは聞いて居たであらうが、今、目のあたりに其の氣高き御姿を見て、之れ正しく唯者ではない、正しくユダヤ人の王、精

神界の力ある方である事を感じ、今となつては此の方に頼るより外には詮術なしと思ひ、「主よ爾國に來らん時我を憶ひたまへ」と云つた。何か心中に判然しない辻褄の合はぬ考へが有つたであらうが、斯る場合に立派な、道理に適つた事が云ひ得らるゝものでない。併しこの偉大なる方によりて自分の幸福を得、恩寵を蒙りたい。是迄の生涯は實に惡るかつたと後悔し、神を恐れこれに依り頼んだ。是に向つては耶蘇は直に赦免の宣告をなし『誠に我汝に告ん、今日汝は我と偕に樂園に在るべし。』と言はれた。他の者はこの男の樣な心がなかつた爲、唯罪を赦し給へと祈られたが、此の男には『汝の罪赦されたり…………』と宣言された。耶蘇にはこの力がある。

第三、耶蘇は十字架の傍に立つて歎き悲みに沈める其母マリヤを見られた。而して此行先きを安樂にして遣りたいと、其の愛する弟子なる、ヨハネ、親族內なるヨハネ、母の甥にあたるヨハネに之を託された。(ヨハネ傳十九〇二十六―二十七參照) 其心持ちを熟考してこれを知るならば、數部の孝經を見るよりも、二十四孝の片輪話を聞くよりも遙かに優る良き教訓を得る。之に就て尚一層深く考へて見れば、種々心の內に思ひ當る事、教へられ暗示せらるゝ處がある。夫は各自の考へに任かせて置きたい。

第四は此處でもう耶蘇は三時間も十字架の上に懸けられて居られたが、遂に心も張り裂けるが如きせつなき聲を擧げて『吾神、わが神なんぞ我を遺て給ふや、』と叫ばれた。この時耶蘇はゲッセヤネの園で黒雲の渦き來るが如き烈しき苦痛から避けたいと願ひ祈つたが、神の聖旨で如何にしてもこれを避ける事は出來ないと知つた時、自ら進んで其の中に身を投じたのであるが、又再びこの場合に『吾神わが神なんぞ我を遺て給ふや』と叫ばれた如く、神に全く捨てられ、神に手離されたやうな心地になつた。丁度吾々に於ても、自分の親しき身內、切つても切れない身內の者が、ある罪を犯した場合、實に恥しい心持ちになる、世間の人が皆自分に對して嘲つて居

るが如くに見え、其の喜び或は笑つて居るのを見ても、自分に對し嘲笑せるが如くに思はれ、群集の内にもつても却つて孤獨の感犇々と胸に迫り、恥羞に堪えずして立つ瀨がない樣に感ずるものである。吾々の如く輕薄な個人主義な各自ばら／＼、めい／＼自分の頭の蠅を自分で追ふ連中、それでも尚其關係上愛の働きから、自分の愛する者の罪惡のために、人から離れ其交際も斷たれるを感じ、自分には何の罪もないが實に配所の月に身を託つやうになるのであるから、此の場合耶蘇の立場に於ては、最も切なる深き物凄き、悲慘にして腸も靈魂も千切れるやうに、實に恐ろしく感ぜられたに相違ない。吾々の如き者には明瞭に解しかねるが、其片端を考へてもさうあつたであらうと思はれる。然し耶蘇が『吾神わが神』と益々それにたより訴へて、何處までもこれに縋らんとする心持を學ばねばならぬ。耶蘇は一々今日の境遇に對し明白な解釋を與へられては居なかつた。種々不思議に思ふ問題もあつた。併し神が必ず此問題を解して下さる、明白になる時が到來するに相違ないと信じ、神の愛、其の誠を疑はない。併し我神は憐れみ深き神である。決して其切なる祈りを長く其儘にはして置かれる筈はない。耶蘇の肉體は刻々に弱りつゝある、玉の緒も將に絶へなんとする場合、其眼も最早やかすみ四方は暗くなりつゝある其時、耶蘇は『父よ我靈を汝の手に託く、』と叫ばれた。この切なる信仰深き神を慕ふ心、凡てを神に託する、即ち煩悶にも問題も皆全然之を其聖手に託して、何處までも從ふと云ふ此の耶蘇の決心に對し、雲の絶間より皎々たる美しき望月の輝き出づるが如く、又再度神の愛に滿ちた聖顏、彼の惠み深き御手が耶蘇の身に添へらるゝ、卑近な譬をとれば、恰かも恐ろしい惡夢を見て目醒めと見れば母の懷に寢て居たと云ふが如き心地が、耶蘇の心に恢復したものと見える。そして遂に『吾渇きぬ、』と云はれた彼れが渇きぬと云つたのは肉の苦痛を感じて來たのである、最早や靈魂の戰は終つた、最も辛棘な苦痛

絶間なき煩悶、不可解の疑問は皆片付いたのである。定めし耶蘇は父の恵み深き手に抱からて居る事を明瞭に意識し、慰安と力を與へられ黑雲が晴れた後の日本晴の如き心地になつたが、同時に是迄考へ及ぼさなかつた忘れて居たやうな苦痛、即ち恰も火事の時に、怪我をなしても其の時に感じないが、終りて後痛みを感んずるが如く、今其苦痛を覺えられたのであるかもしれぬ。又肉體の苦痛は之を忍び抑へるにしても程度があつて、長く忍耐する事の出來ぬものであるが、兎も角耶蘇はこの時肉體の苦痛、其烈しき衰弱を感じられた、肉體の苦痛を感じられた時耶蘇の精神上に於ては大勝利を得られた、耶蘇は決して痩我慢をしない、其處に居る人々、即ち慘忍非道の敵に對しても恰かも、自分の友に對する如く『我に飲せよ』と丁度サマリヤの女に言ひし時と同様に求められた。ページェット監督は其著書「Studies in Christian Character」『イクスト者の品性に於ける研究』に此一節を摘出して、耶蘇が誰に對しても友人の如くせるこの氣高き有様を說いて居るが常にこれを思ひ出さずには居られない。實に斯くの如き心持ち、誠に單純且寛大にして決して人を敵視しない、此の心があるによりて、『彼れらを赦し給へ』と云ふ祈りも出て得るのである。丁度敵に向ひ友が親類の者にでも對するかの如くに訴へ求めらるゝ、實に大きな美しい心である。

斯くて與へられしものを飲み終つて我が靈魂を汝に與ふと云ひ、將に其息を引き取らんとする時、父の御手に飛び込むが如き感がある。或人は曰く、これはユダヤの女等が其子を眠らす時搖籃の傍で、唱へる祈、或は歌であると云ふが面白い事である。耶蘇は今母の添乳にて其の歌を聞きながら安眠せる其幼時代を回想して居らるゝか、それほどでないにしても實にその様な心地がせられる。この時聲を擧げて勇ましく『我が事竟りぬ』と叫ばれた、實に凱旋大勝利である。

何卒世の苦痛に對し、自分の苦痛に對して此イエ

スの最後の有樣、ゲッセマネの祈り、十字架上の御言葉等より眞に學んで戴きたい。自分の事のみを思ひ、他人の事に頓着せず、己が罪を知らずして、徒らに屈託し、神の事を思はず、之を忘却せるもの、又眞の平安、眞の慰藉を知らぬものは、先づ此處を熟讀して、人の身の上、又自分の身の上について如何なる心得を有すべきか、如何なる風に各自を修養すべきかを學ぶべきである。實にこの耶蘇の最後の有樣には、人情も神も、肉體の苦痛も、罪惡の問題も誠に美しく配合され、實に神々しく、尊きものである。成程人生如何にすれば眞の慰安を得られるか、何處に其慰安があるか、其の力はあるか、これらの事柄は此の間に學ばねばならぬ。（文責在記者）

歐洲に於ける戰時の生活

ミス、ラウス

玆に揭げました一篇は英領カナダ、トラント市なる加奈陀婦人俱樂部に於て、萬國基督敎學生靑年會同盟幹事ミス、ラウスが講演せられたものであります、誠に興味深く、且私共日本婦人に取つても大いに得る處あらうと思つて其大要を譯載することに致しました。（記者）

今回の大戰亂によつて英國に於て來せし變化は實に顯著なものであります、目下英蘭は殆ど一つの廣大なる陸軍々營となつて居ります。而して男子は皆其訓練のために其處に赴き、婦人はこれに代りて實業其他の社會に進み出で男子の勤務を執つて居ります。市內電車中の切符切、車掌等の職は皆婦人之に當り、又軍用其他の自働車運轉にも從事して居ります。或デパートメントストワーに於ては唯重き荷物の揚げ下し其他これに準ずる力業のためにのみ男子を傭ひ、其他は全部女店員のみを使用して居ります婦人達は皆其家庭を殘し或は其故郷をも後にして軍

需品工廠に入つて居ります。或軍需品工廠では一萬人の婦女子を使用して居ります。銀行にも新設軍需局の如き政府の役所にも婦人の姿を見ない處はありません。以上述べたる如き職業に從事せる婦人達が男子に給與せしと同額の俸給を得つゝあると云ふ事は其婦人自身にとりても、又平和回復の後其職に復歸する男子等にとりても共に大いなる奬勵となるものであります。

今回の戰亂は又婦人をして以前男子のみに獨占されて居た種々の職業に就かしめて居ります。殊に病院其他に於ける醫術上の働きに於ては此が事實なる事を證明して居ります。而して即ち醫學專門學校入學の女學生の數の著しく增加せし等は其一證であります、一醫學專門學校に於ては其入學志願者が、四倍の盛況を示して居るさうであります。種々の男子の學校に於ても下級生のためには、女敎師を傭つて居ります。右述べたる如き俸給を受けて働いて居る職業の外に婦人達は無報酬で多大の働きを致して居ります。多くの所謂爲す事なき閑暇に苦んで居た婦人達も今は拱手傍觀する事なく皆看護其他赤十字社の諸般の働きを助くるに忙殺されて居ります。陸海軍々人の家族のための救護資金の取扱ひは皆諸婦人會の手によつてなされて居ります。數千の婦人達は週の終りに於て普通の職工を交代をなし得るやう特に軍需品製造に對する政府の傳習所に入り速成科を修めて居ります。彼等は又陸軍省の下に組織されたる陸軍々營或ひは停車場に於ける兵士等のために設けられたる無料酒保を助けて居ります。

其生涯中是迄決して仕事と名のつく事をした事のない若い婦人達でも、軍需品工廠に働く婦人達に其休憩時間に食事を與ふる女子青年會員の手傳ひをして居ります。(七分間に二百五十人の婦人に食事を供するのですが其給仕をするのでも決して容易の業ではありますまい。)食物營養專門家としての敎育を受けた婦人達は陸軍兵營内の割烹を監督するために傭はれて居ります。病院の働きは英國々内に於てのみ

ならず、セルビヤ其他の國に於ても行はれて居ります。實際に於て英國の婦人は各々何事かをなすべき好機會を與へられたのであります。唯短時間の間に然かも規則正しく出勤する事の出來ないものさへも種々の工廠或は補充部に於て何等かの仕事をして居ります。

大なる社會上の變化は又明白なものであります。婦人達は其の感情互ひに融和し、社會上諸階級の區別も又漸次消失し、新標準が立てられつゝあるのであります。一般に奢侈の風は失せ、婦人達の衣服を新調する事は非常に減少致しました、即ち或るものは不如意なるがために致方なく新調する事を見合せるのでありますが、他は出來得る限りの質素を守り儉約して金を貯蓄し、戰費のため政府が募集して居る公債に應ぜんためであります。(これがため多大の打擊を蒙りし裁縫師或は婦人帽子商等は今は玩具製造、又は彈丸製造等に傭はれて居ります。贅澤なブラウスを製造して居た工場は今は陸軍々服を製造して居ります。)食物に關しても又質素節約が實行されて居ります、肉は朝食の献立から消え去り、バタの代りにマージョリン(ラードの一種)が用ひられるやうになりました。主婦達は多くは女中を解傭し自ら勝手元に働いて居ります。斯くの如き有樣でありますから今日は全然以前と異れる生活狀態が築かれて居ります。而して到る處に献身犧牲の精神が溢れて居るのであります。

以上は英國に於けるの狀態でありますが、佛國に於てはこの戰亂は英國以上に接近して居るがため、遙かに實際的となつて居ります。敵兵は其國內にあり。人民は皆砲聲彈雨の內に居ります、目下パリ市內に於ては一つの演藝芝居等の廣告を見る事は出來ません。唯目に入るものは仕事所及看護婦傳習所の揭示のみであります。何處に行つても喪服をつけた婦人達が勞働所或は病院に其一日の仕事をなさんがために入つて行くのが見受けられます。今日フランスで最も注意を惹くべきものは男子にも女子にも同

じく確固、沈着にして泰然自若たる精神の躍如たる事で徒らに興奮する事なく唯到る處に献身犠牲の誠意が充滿して居る事であります。フランス婦人は皆今日彼れ等婦人團體の双肩にかゝつて來た唯一の肝要なる仕事は諸般事業の指導者としての位置に適するやう婦人を教育する事であるとの自分等の確信に力を入れて居ります。男子は未だ歸つて來る樣子もありません。されば從前男子によりて行はれて居た多くの事業は、若し婦人にして男子に代りこれに當り其事業を繼續し行くの準備がなければ中止して仕舞はなければなりません。佛蘭西の學生基督教青年會は大なる打擊を蒙りました。一千九百十四年（大正三年）十一月に戰が開始された後、直ちに凡ての學生指導者を共に召集して一つの協議會を開きました。是に集つた人々の内四人のみが男子で、然かも其の内三人は二週間以内に其聯隊に加入すべきものでありました。目下萬國學生青年會事務所に於ては婦人速記者が其機關雜誌の編輯を司どり、且會の諸報告其他の書類を發送する等、一人のものが爲し得る限り其事務所に於ける諸般の働きをいたして居ります。佛蘭西に於けるあらゆる男子、即ち僧侶、修道士、ユダヤ教の教師及外國に赴くべき宣教師等に至るまで、凡て召集され出陣して居ります。それがため往々三の教會が一人の牧師によりて司さどられて居る事を見受けます。

又ロシヤに於て戰は更に遠いやうに思はれます。而して凡て日常生活の狀態もフランス程には變化を來して居りません、然し猶ほ人民はこの戰亂により心から動かされて居ります、戰爭は人民のものではない、政府のものであると云つて居りますが、中々さうではありません、矢張り人民の戰爭であります。上流社會の婦人の少女も皆等しく實際看護に從事し其方面に大なる働きをして居ります。ロシヤに於ける三萬或は四萬の女學生は以前政治的の事に顯はして居たと同樣の勢力を今は戰爭に關する仕事に集注致して居ります。男裝して戰線に立つといふのは

極少數でありますけれども多數の者は兵士水兵等の遺兒のために設立された孤兒院等のため寄附金を募集するが如き救濟事業に働いて居ります。レスノー、ペトログラード、キエーフ等にある專門學校は、半ば一二千の傷病兵を收容し得る病院に變化して居ります。そしてこれ等の病院の仕事は其治療の外は全部男女の學生によりてなされて居ります。彼等は快方に向つて居る患者には讀書を敎へ、又は彼等のために手紙の代筆をして居ります。ロシヤの百姓の婦人達も又同樣に獻身的で自らを犧牲にして居りますが其一例として或時一人の貴婦人が救濟事業に對する彼女の寄附であると云つて拾數錢の金を持つて來ました。この金は彼女が長い間冬の長夜にランプを點さずに其油を買ふべき金を貯蓄したものでありました。而して彼女はランプなしでもやつて行かれますと云つて居たさうであります。

未だ修業中の學生に對しては兵役の義務が課してない處から、學生にして出陣したものは比較的少數であります。それでも尙一萬六七千の學生は義勇兵として出征いたしました。此度發布された新法案によれば學生と雖も召集される事が出來る事になつてをります。併し右に申した事を別としてロシヤに於ける著して社會的變化は、ウヲツカ酒（ロシヤ人の用ゆる酒）の販賣を禁止せし結果、町を歩いて居る泥醉者の姿を見ぬ事であります。これが結果として戰時であるにも拘らず、婦人子供等は以前よりよき食物を取り、よき衣服を着る等一般に富裕なる生活をなし、戰亂勃發の以前よりも、遙かに幸福なる家庭を營んで居ります。

中立諸國に就いて云へば、瑞西、和蘭等も少なからず損害を蒙りました。即ち前者は交戰國に取卷かれて居るがために其國境を守備し、萬一の場合に備へて置かなければなりません。又後者は戰線に接近して居るがため、これ又其國境を防禦しなければならないからであります。これ等の國に於ける物價は著しき暴騰を告げて居ります。而して或工場などは

戰亂によりて、幾分の利益を得た處があるとは云へ尙結果として多大の損失を蒙つて居ります。尙此兩國は交換された重傷捕虜に對して、大いなる安全と慰安を與へるために盡力致ましした、又同じく交戰國の婦人等にして、其敵國より本國に歸へるもの、途中を保護し、或はこれに便宜を與へました。又此の大戰亂勃發の當時、恰かも岸に乘り上げた舟の如く、瑞西に殘された他國の女學生たちは、皆手厚き待遇と、懇切なる世話を受けたのであります。ベルギーの避難民も又和蘭に於て親切なる保護を與へられました。尙ベルギーの學生は一つの假舍に收容され、其敎授達も其處にあつて平常と同じく其授業を繼續して居ります。避難民は自分等のために持運びの出來る手輕な木造の家を建てるやうに傳習して居ります。この家は戰爭が終結し、平和恢復の曉にはベルギーへ持ち歸へる事が出來るのであります。

スエーデン、ノルウエー、デンマーク等に於ける婦人は今回の戰爭によりて、左程の影響も受けませんでしたが、それでも尙ほ深刻に今回の戰爭に對する注意を怠らないで、其調停に與かりて、何等かの用に立たん事を大層希望して居ります。

昨年に於ける旅行者之友

ミス、ペーチ

東京基督敎女子青年會が旅行者之友事業を初めて上野停車場に開始したのは、實に大正二年十二月の事でありまして、爾來僅に滿二ケ年の日子を經過したに過ぎないので御座いますが、漸次に社會からも其の必要を認められるやうになりまして、昨年の春以來は上野停車場のみに止まらず東京停車場にも常に係員を出張させる事になり。從て係員の數も前年度よりも一名を增加し、目下三名の專任で右の兩停車場に列車の着く度每に旅客を迎へて、其の必要に應じて適宜の世話を致して居ります。殊に東京停車場には鐵道院管理局の厚意によつて待合室の一隅に

旅行者之友係員室を設置する許可を與へられたるために、保護を要する婦人達と談合する必要ある場合には、非常の便宜を得ることゝなりましたのを感謝して居ります。

旅行者之友係員の手に救はるゝ婦人は農も商もあれば工女も女中もあります、又既婚者もあれば未婚者もあります、離婚されたるもの、寡婦となりたるもの、さては狂女までもあるので御座いますが、其の殆ど全部は悲慘な境遇に陷り憫むべき運命に飜弄せられたもので、其の不幸にして氣の毒なる事實は實に筆にも紙にも述べられないやうなものが多いのであります。それで昨年中我が旅行者之友に於て取扱つた人員は道案內をするとか荷物の世話をするとか、又は忠告を與へるとかを算入すれば勿論數へ切れない程の多數でありますが、就中一夜以上二週間の間旅行者之友宿泊所に止宿せしめて保護を加へ、夫れ〳〵適宜の方法によつて其の身の振方をつけてやつたものは百十八人でありました。今これを出立地によつて府縣別にすれば、

福島	一〇	富山	四	神奈川	一
群馬	九	青森	四	京都	一
茨城	八	秋田	四	鹿兒島	一
新潟	七	長野	四	山梨	一
栃木	七	石川	四	愛媛	一
埼玉	六	靜岡	四	德島	一
宮城	六	三重	三	長崎	一
千葉	六	愛知	二	岡山	一
山形	五	大阪	二	廣島	一
岐阜	四	岩手	二	北海道	四

又宿泊せしめた月別人員を見ると

一月	七	五月	一三	九月	二三
二月	五	六月	一八	十月	一三
三月	七	七月	六	十一月	一一
四月	七	八月	一一	十二月	一三

になります、そして更らにこれを年齡によつて區別すると

八歲	一	九歲	一	十二歲	三
十三歲	二	十四歲	一	十五歲	六
十六歲	七	十七歲	一五	十八歲	一八
十九歲	一八	二十歲	二一	二十一歲	四
二十二歲	四	二十三歲	三	二十四歲	五
二十五歲	四	二十六歲	二	二十七歲	二

二十八歳	一	三十歳	一	三十一歳	二
三十三歳	一	三十五歳	一	三十六歳	一
三十七歳	一	四十歳	一	五十歳	一
七十二歳	一				

となるのであります。これによつて考へて見ますと福島、群馬、茨城地方より上京し來るものが多數で時期に於ては九月と六月、年齢に於ては十七歳から二十歳までが最多數であることが分るのであります。

そしてこれ等の年若の婦人が何故に上京するかといへば、所謂上京の理由を區別すると

強制的婚姻のため	六	工場に雇はる目的にて	四
家庭不和のため	二三	奉公の目的にて	三一
不貞操	一	都見物のため	六
離婚のため	五	知人緣者を便りて	六
工場被雇又は奉公中逃亡	二三	欺かれて上京	三
全く目的なきもの	一	苦學の目的にて	一
白痴	三		

でありまして、これを見ればこれ等の上京者が如何なる事情の上に上京するに至りしかを略ぼ推察するに難からざる次第であります。故にこれが處分を致しますについても、或は其の國元に照會するとか相談するとか、身許を確めた後に、或は國許へ歸らせるとか、或は更らは東京に於て奉公口を探してやるとか、其の外それ〲の身の振方をつけてやらねばならないのであります。大體に於て國許へ照會の上本人を引取らせる方針を採つて居るのでありますが、すべてをさうする譯にも行かず、奉公口や働場所を斡旋する場合などは本人に關して取調べるのみでなく、更らに雇入先をも調査してかゝらねばならぬ事でありますから、係員の骨折と手數は一通りではないのであります。殊にこれ等の上京者の常として十中の九分九厘は逃走者でありますから、これを處置することも普通の手續にては濟まず、甚しきは肉身の親子の間柄であつてさへも其の子の引取を肯ぜざるものもある位で、これが交渉照會通信等種々手數の頻繁なることは到底想像の外であります。今昨年中に取扱ひました處分別ともいふべきものを申上ぐれば、

歸國せしめしもの	六三	國許へ同伴せしもの	一
奉公せしめしもの	四七	國許へ照會中逃亡	一
警察へ引渡せしもの	二	養育院へ送りしもの	二
病院へ入院せしめしもの	一	親戚へ引渡せしもの	一

とする事か出來ますが、その種別目を一覽さるゝだけでも、其の處置について如何に面倒であるかを推することが出來やうと思ふのであります。

以上は旅行者之友宿泊所に宿泊せしめて保護を與へたるものゝ處分を示したのでありますが、若し此の外に旅行者之友係員が停車場に於て男女といはず老若といはず、臨機の保護給與をなしたるものは實に其の數は數百人に上つて居ります。其の世話をなしたる種別をいへば

道案内	旅費施與或は支拂	電車代施與
送り屆け	食費施與	人力車代施與
荷物處分	食物施與	上京通知者の出迎
救世軍其他へ紹介	衣類施與	

等でありまして數限りないことであります。

旅行者之友事業は唯今の處は上京通知者を出迎のためには東京及附近各停車場に係員を出張せしめますが其外は僅に東京上野の兩停車場に於て着手され居るに過ぎません。けれども近き將來に於て品川其他の停車場にも係員を出張せしめて旅行者の便宜を圖る必要は焦眉の急として認められるのであります。又此等の事業擴張と共に係員の手に托されたる婦人及び刻下の就業難に困つて居る婦人にして本會に身を寄せ來るもの、漸く多きを以てこれ等の爲に適當なる職業の紹介をも開始し自然に此の事業に附帶せる新しき働として企畫せねばならぬ事情に立ち至つて居ります。

最後に一言したいのは經費のことであります。目下旅行者之友事業に對する經費は年額千五百圓内外でありまして、全部有志の寄附によつて支持して居りますが、事業の擴張及附帶事業の開始と共に漸次經費の膨脹を來すのはまた止むを得ざる次第でありますが、しかしながら此の事業が常に社會有識の認むる所となり、現に其の成績の見るべきものがあります以上は此の事業に對する資金の同情は必ず與へら

れる事と信じて居ります。其の方法として一時寄附を仰くは從來と異なりませんが、尙ほ贊助員を募り年々定額の寄附を賜はるやうな新しき方法も立てゝ見たいと考へて居ります。願くは仁俠なる天下の諸君が此の事業のために一片の同情を投ずるに吝ならざる事を祈つて止まないのであります。

思出のまゝ

松宮生

▲某女學校を經營して居る人の話によると、近頃は高等女學校程度の學校に入學する女子は頗る多數であつて、官立でも私立でも、何れの學校でも、相當に生徒を收容するに困難を感ぜないが、高等女學校程度以上の學藝を修むる女學生に至てはまだ中々少數であつて、現に某女學校の如きも高等科の設備あるに拘らず、高等女學校程度の學修を卒れば、更に進んで高等科を修業するといふもの極めて少なく、大抵は高等女學校程度を卒ると共に退學する傾である、若し高等女學校程度の修業に終るものと、更に高等の學藝を修むるものとを比較したならば、恐く七對三乃至六對四位の割合になるであらうとの事である。

▲是は何故であらうか。勿論甲の學校の高等女學校程度を修めた後に、乙の學校の高等科へ轉學するとか、又は他の專門學校に進むとかするものも必ずあるに相違ない。又學資などの關係から、希望はあつても其の希望通りに運び兼ねて廢學せねばならぬ場合になるものもあらう。しかし、其の多數は高等女學校を卒業すれば先づ婦人としての一通りの修業は修了したもののやうに考へて退學し、其の後一年なり二年なり、家事上の見習をするとか、裁縫とか料理とかの稽古をして、直に結婚するといふ順序になるのが普通のやうに見える。甚しいのになると高等女學校程度の卒業を待ち構へて、或は卒業して後幾何もなくして、既に結婚するものも亦決して少なく

はないやうである。

▲斯くの如きは必竟するに婦人を以て家庭に籠城するを以て能事了れるものとして家庭以外の舞臺を踏ましめず、從て一日も速く良縁を得て家庭に入り、男子に寄生して安住の地を有つを餘儀なくし、禍福安危共にすべてを良人の手に委し、自然に自活の思想を缺き獨立の精神を喪ひたる餘弊に外ならぬであらうが、しかもこれが今日の女子社會の通常事であつて、教育家もこれを怪まず、天下の識者も亦これを是認し、婦人自身も亦往々これに滿足して居るの傾向があるのは、眞に日本今日の婦人のために悲しむべきの至てあると思ふ。かくては先覺者が如何に心を盡して婦人の位地を高め社會の一員として男子と同等の地歩を占めしむるやうに努力しても、中々道程遠くして日將に暮れんとするが如き思に堪へない心地がする。

▲さればとて、決して婦人を家庭から引離さうといふ暴論を試みやうとするのではない。言ふ迄もなく家庭は婦人の働場所として唯一の場所ではないとしても、最適當の場所として先づ指を屈せらるべきであるに相違ない。唯今日の青年女子が多くは家庭に入ることに急で、男子の寄生者たるに甘んじ以て安住の地を作るに汲々たる傾向は、決してそれが婦人の位地を高めて男子と同等にまで進ましむる精神＝希望とは到底並行し得るものでないことを憂とするのである。のみならず、斯の如き傾向は婦人其者の上にも、斯かる婦人を入る家庭其もの丶上にも、決して健全な幸福を増進せしめ得られる所以とはならないと思ふ。今日の婦人乃至婦人の指導者たるものは先此點に於て覺醒してかゝらねばならぬ必要がある。

▲夫れ位地は惠まるゝによつて得る筈のものにあらずして、自ら進んで獲得すべきものである。そして自ら進んでこれを獲得するのは各自の實力如何によるのである。實力なきものは假介位地を得やうとしても結局徒勞を終るのである。又よしこれを得たとしても持續することは到底むづかしいのである。實

力の件はない位地は結局空位に過ぎない。要するに婦人問題を解決するの道も亦これに外ならないと思ふ。即ち婦人の位地は他よりの讓歩によつて惠與さるゝを受くるにあらずして、婦人自らが起つて獲得すべき筈であらうと思ふ。言ひ換へれば問題の歸決は婦人の實力問題である。故に若し今日の婦人として能く男子を凌駕するの實力だにあらば、男子と同等の位地に進むこと、否猶ほ以上の位地を占むることも決して困難ではないと信ずる。然り、其實力のある所に位地其のものも進むことが出來るのは自然の順序ではあるまいか。然るに今日の婦人が現今の狀態にあつて果して其の頭上に纒綿して居る諸般の問題をば能く解決し得るの實力が具備されて居るであらうか。日本婦人諸姉の靜な反省を希望する、遠慮のない所をいへば頗る此の點に疑惑なきを得ないのである。

▲もとより、現今の婦人中には學力に於ても財力に於ても德操に於ても、到底男子輩の及ばざる實力を有する婦人達の決して少なくないことは、確認される所であるが、されぱとて婦人全體の上からおしなべて見た所で如何であらうか。更に青年女子が高等女學校程度の修業に滿足して、取敢へず家庭に入つて安住の場所を見出すに急にして、所謂未成品的の婦人が家庭に籠城して良人の機嫌に迎合して居るやうな狀態であるのを思ふ時に、其の婦人の實力の發揮が果して那邊にまで徹底するものであらうか。疑惑の起るも誰にしても偶然ではあるまいと思ふ。

▲東京府下に於て中學校入學志願者の數は年々二千五百名内外であらうといふことである。そして今年の如き第一、第四の兩中學の入學志願者は二千名に餘つて居るといふことであるから、其志願者中には兩校へ二重に志願書を出したるものありとしても、府下志願者の大多數は右の兩中學に向つて入學志願者たる譯である。そして其の兩中學が入學を許可する新入生は三百名内外であらうとすれば、殘りの千六七百の兒童は落第者として他の中學に入學せねば

ならぬことになる。此の有様は抑も何事を私共に向つて語るものであらうか。

▲第一、第四の中學に毎年志願者の多いことは知れ切つた事實である、從つて落第者の多いことも知れ切つた事實である。故にこれに入學せんとするには豫め餘程の準備と確信を要するのである。然るに二千有餘の志願者は決して十分の準備と確信を有するもののみでないことは明である。しかも競ふて入學を志願する所以は、要するに入學試驗に於て僥倖を萬一せんとする投機心に原因するのである。即ち第一、第四の入學試驗に於て合格を僥倖するを得ばよし、若し運拙くして合格することが出來なければ轉じて次位の中學に入るべく、これも合格が出來なければ再轉して其の次位の中學に落付かんと期して居るものが多い。されば一人にして二三の中學に入學を志願するは決して珍らしくないといふ事になるのである。

▲未だ僅に小學校を卒業したに過ぎない兒童時代からして斯くの如き投機心を植付けるやうなことをするのは、將來着實な氣風を失ひ品性を損ふ緒となる恐があるではあるまいか。入學試驗は今日の教育制度の然らしむる所で止むを得ないこととはいへ、苟も其の父母たるものがこれに氣附かずして制度の弊に追從して兒童を其の渦中に投じて得々たるは何たる心得違の甚しいことであらう。

▲思ふに兒童の中學校入學問題は教育界の一問題であるに相違ないが、實は各自の家庭及子女に關係深き備に講究せねばならぬ實際問題である。父母は兒童の將來のために最も健全にして最も善良なる徑路を取つて與へねばならぬ。入學すべき學校の如何を問ふは勿論大切なるも、兒童の將來を善導するはそれよりも更に大切なることを忘れてはならぬ。殊に兒童の教養に直接する場合の多い世の母たる人々に向つて深く注意を促したい。

▲此の頃日本服裝の改良に就て新案服裝展覽會なる

ものを開催する企があるさうである。これ誠に當節柄缺くべからざる計畫として結構なことに相違ないが、果して其の主旨に基くやうな便利にして經濟的で、しかも形狀恰好の優美な實用的の服裝が、此の催によつて提供せらるゝであらうかといふ事になると、聊か其の確答に遲疑せざるを得ない。

▲日本の從來の服裝が到底今後の日本社會に於ける實用向のものでないことは誰れも異議のない所で、早晩改良せねばならないに相違ないとしても、これは單に服裝のみの改良といふ譯には行かない問題であつて、少なくとも住居問題と相伴ふのである。どうも住居問題が解決せられない今日では、それと引離して服裝問題丈の解決をしても、近く更に住居問題の推移と共に服裝問題も亦新案又新案を提供せねばならぬことになると思ふ。

▲これ等の問題を解決するに就ては、成るべく古有の形狀なりを恰好なりを失はないで新服裝を案出したいとか、袖の如きは短くして筒袖主義を取るとか、婦人ならば帶のやうなものは廢しやうとか、種々に考へれば考へられもすることであるが、要するに我邦將來の住居問題と服裝問題は、歐米の風に則つて洋裝の衣服を着けて洋裝の家屋に住居することに歸着するに至るを疑はない。もとより多少の變改は行はれるとしても、其の改良の根底はこれより離れることの出來ないのは言を待たない所である。

▲そして、今現に推移しつゝある大勢に鑑みるも、公衙の如き、學校の如き、殆ど洋館ならざるはなくまた此處に執務從業するものも亦洋裝ならさるはなき有樣であつて、我邦の衣服も住居も遺憾なく歐米風に變改され行きつゝあるを明に示して居る。此の大勢の趣く所を見ても其の歸着點が那邊にあるかを察するに難からざることである。

▲されば、今日に於て服裝や住居の問題に注意するには此の傾向を見逃してはならないと思ふと同時に寧ろ新方面に多大の考慮を費さんよりも、住居も服裝も直に歐米の風を採つて以て我邦のものとなすも

敢て何等の差支を生ずることなきを信ずる。唯この事を斷行するの勇氣と確信を有するものの起ることが誠に少ないのを殘念と思ふ。

▲序に考へたいことは將來の日本人が着用すべき衣服地質問題である。これも服裝の改善に伴ふ問題であるが、現在の絹布や綿布が將來に於ける實用的衣服地とは考へられない。此の點からしても亦毛織物を使用するやうになつて、少くとも洋服的服裝が發達することにならう。これ自然の趨勢である。

心の內の隱れたる人、即ち壞ることなき柔和恬靜なる靈を以て裝飾とすべし、此の靈の裝飾は神の前に於て價貴きものなり。

樂しかりし寄宿舍生活

河口正子

寄宿舍と云へば直ぐ冷たいとか、淋しいとか云ふ言葉を聯想するものでありますが、私が實際溫かき家庭(ホーム)をはなれて、上京しはじめて寄宿舍生活に入つた時、入舍以前の心配や恐怖が皆杞憂であつた事を知り、眞に溫かき空氣に觸れて、心より嬉しく感じましたのは私が二年前卒業せし女子英學塾の寄宿舍であります。私は同塾に四年と云ふ可成長い時日を送りましたが、しかも最終の一年間は私の一家が東京に移轉しました爲、私も當然宅に歸へり通學致すべき筈でありましたが、此時私は塾長、舍監其他の先生の口添を願ふて無理に母を納得させて遂に卒業迄止まつたのであります。斯くの如く私の心を惹き付けた此寄宿舍の生活は如何なる有樣であつたでせうか。丁度當月は皆樣の女學校や其他高等の專門學校に御入學の時期でありますから、御參考迄に私の經驗中の樂しき記憶として殘つて居るものゝ二三を記して見ませう。

先づ第一は土曜日でありました、この日は普通の學科はなく、三年生を除いての他の寄宿舍は皆午前中裁縫、音樂、料理等の組に出なければなりません。塾は御承知の通り英語專門の學校である處から、誰でも內容を御存知ない方は、英語のみをあやつり生意氣でハイカラで、料理裁縫などゝ云ふ家庭的な女らしい事には全く沒交涉で、寄宿生に至つては尙一層甚だしきもので、家庭等には全く入る事の出來ないもの、男の出來損じのやうな者だらうと思つて居らるゝ樣でありますが、これは全く皮想の推察であります。塾長は特に

此點に注意せられ、通學生は家庭に居りますのでよいとしても、寄宿生は家を離れて來て居る故、凡て先生の責任であるからとて、裁縫丈は特に寄宿舍生の爲必修科となつて居ります。屢々耳にすることであるが、よく寄宿舍生は洗濯を厭ひ汚れ物を溜め置きて一纏（ひとまとめ）にし小包で自家に送るとか、或は休暇に持ち歸つて仕立直して貰ふのが寄宿生の普通の如くに思はれて居りますが、塾ではこれを嚴禁され、其爲に裁縫が必修科になつて居ります。塾は學科が非常に難（むつか）しく餘程の勉強を要し、定まつた自修時間丈では到底足りない程でありますので、自分の汚したもの全部の仕立直しは不可能でありますが、尙一學期二三枚の着物は仕立上げねばなりません。又足袋や襦袢の修繕等もこの時間中隨意になす事が出來、且其修繕法をも先生に教はる事が出來ますので舍生の得る利益は多大なものであります。私が足袋つぎの上手になつたのは塾に入つてからのことであります。

洗濯は皆大層上手であります。洗濯所が理想的に便利よく出來て居る故もありませうが、毎日午後四時頃に洗濯場に行つて見て、誰も居ないと云ふ事は殆どないのであります。兎角入學の當座は洗濯が出來なかつたり又不性であつたりして、洗濯屋に出したがるのでありますが、同室の上級生はこれを看過せず、先に立つて洗濯場に導き洗はせるのであります。それが爲漸次上級になるにつれ上手になり又厭しい感が消失いたします。

土曜日の午後は女中の休日で夕飯は生徒自らこれを整へるのであります。一寮各二十五六人の生徒を四五人一組として級別にし、公平に分け三年生が其頭（ヘッド）となり、舍監より若干の金を預り、自分達のみで献立を作ります。これには中々腦を使つて考へますが、愈々出來上れば、一度舍監の批判を乞ひ、土曜日午後生徒自ら風呂敷を携へて麴町の通りに出かけ、八百屋、魚屋、乾物屋、果物屋、菓子屋、肉屋等を廻り、成可くよき物を安く買つて來ます。此買物は競爭的で、出來る限り上手に直切り、安く買ふほど鼻が高いのであります。下級生の間は此買物がきまり惡く、羞かしいやうで、上級生が商人と交渉して居る間も、店頭に立つて居たくないやうな感が致しますが、漸々進級するに從ひ鐵面皮で平氣になつて參ります。私も同樣の經驗を致しましたが是が爲、東京に於ける食糧品の相場や買物の仕方を覺えました。舍生が袴を着けて魚屋、肉屋、八百屋などに買物をして居る有樣は、全く異彩を放つて居りました。それが爲、何處の店でも全く親しくなり、私共が參りますと直ぐ塾の生徒たるを知つて、特別に大割引をして吳れる程であります。又魚屋などにても、こちらから幾十人前幾十錢より使はれないと、遂には豫算書まで見せるものですから、しけの時でも笑ひ乍ら、特別扱ひをしてくれます。斯る有樣故電話にて註文する事も出來るのでありますが、皆樂しみの一つとして態々出かけて買物を致します。買物が終れば各自襷（たすき）前掛けで、甲斐々々しく臺所に立ち、料理に取りかゝります。或る者は皿、茶碗を拭き、或る者はだしを取り、味の加減を見、又或る者は魚を燒く等、皆せつせと働いて、出來上れば食堂の用意を致します。食事は六時半でありますが、大抵二三時間で三十人內外の支度を致します。此の夜は生徒のみならず校內に住居さるゝ先生方を、南北の二寮に別けて招待します、それで舍監とも三四人の御客樣があるわけで、この上二人の女中の分も作ります。御飯のみは釜が大きい爲、御飯の後始末と共に女中が致しますが、御料理後の臺所は、生徒が片付け置く事になつて居ります。此料理

は大抵一汁三菜或は、二菜で、食物の御菓子がつき、費用は其時三十人前内外で、三圓でしたが後で四圓になりました。此定額より超過するのは、非常な恥辱で、一錢でも多く殘るのが誇りでありました。食後は先生生徒共に、種々の遊戯談話等、各々好みの事をして遊び、西洋の先生の時等はダンスに打興じ、十時過ぎ迄遊びました兩寄宿舍とも先生方よりクリスマスの御祝等に贈られた、加留多、ピンポン、其他の玩具が、この夜のために備へられて居ります。此れは毎週でありますが、毎學期一回、學校に關係ある全部の先方を招待します。此時は特に費用を增して、大奮發の御馳走を作ります。そして食後は矢張り種々の遊戯或は、各自の隱し藝を出しなどして樂しく遊びます。此の日は當番の者は忙殺されるのでありますが、一學期中で舍生の最も待ち焦がれて居る、愉快な時であります。此日のみは、日頃こわいと思ふ先生も、少しも恐れず、全く打解けて親睦いたしますので、先生生徒間の融和が出來て、大變愉快で御座います。

日曜日は昨夜の疲れのため、起床時間、食事時間、凡て少しづゝ遲れて居ります。午前は吾々所屬の教會、未信者は塾長の教會に參ります。此の事は決して强いられるのではありませんが皆進んで參ります。午後一時間組に分れて、修養のため牧師、教師方の聖書講義があり後共に禮拜を致します。同じく夜七時より、夕の家庭禮拜がありますが、之は全く生徒のもので、學校より定められたものではありません。そして生徒が順番に司會者となり一時間共に同じ心を持つて靜に祈り、感想の交換を致して、舍生自ら精神の修養に力めます。續いて二三人の者同じく當番で、女中等のために集を開き、讃美歌を敎へ、或は聖書の話を致します、これがため女中等は大いに喜び、厚き信仰を得た者もあります。此夜は鄉里に殘して居る愛する家族の事、朋友の事を思ふて、皆が其祝福を祈るのでありますから、何とも云ひ得ぬ嬉しい感じがあります。此集會は當塾青年會の働きの一つとなつて居ります。

次に樂しかりしものゝ一つは降誕祭の日であります。十二月二十五日の朝は、舍生は皆三時頃床を出て、或者は寢卷の上より肩掛をかけなどし、髮も其儘で、先づ塾長ミスハッホンをはじめ、須藤先生、河井先生、其他校內に住居の先生方の寢室の下に集つて、降誕祭の歌を歌つて起します。此時メリークリスマスの聲をきく迄は、幾度も歌を繰返します。これが終れば有志の者のみ校外で、近傍に住居の先生方の宅に行き、起し歩いて引上げは、大抵七時頃であります。或西洋人の宅では私共生徒の來るを豫期して、茶菓の用意が致してあります。勿論これも生徒自ら好んで爲す事で、唯有志の者のみが致す事になつてをりますが、信者のみならず、未信者の者も殆ど全部之に加はつて居るのは、面白いのではありませんか。又此日の晝、若しくは夕べにクリスマスディナーが開かれ、先生及古き寄宿生なりし卒業生を招きます。此時の料理も舍監の御指圖で生徒がこしらへるのであります。後珍奇な餘興があつて誠に樂しく此日を祝ひます。

愈々學期試驗も終つて、上級生の卒業が定まれば、二年生の者が主催で特に寄宿舍のみの送別會が開かれ、此日は三年生を正客として、矢張り手料理で先生方と共に晩餐會を催します。そして先生も生徒に特に面白い餘興や、福引をして遊び、時の過ぐるに氣付かぬ程であります。此れは卒業して行くものに取つては最終の樂しき思出で、忘れ難きものであります。

右に述べました事は、唯樂しかりしものゝ重なる物で、其全部は到底云ひ盡す事は出來ません。併し、是等を除いても、實に樂しい生活でありました。此寄宿舍には他に見るやうな書いた規則なるものが一つありません。否規則と名付けるものが皆無であります。強いて規別と云へば、起床、時間、食事時間、自修時間及入浴、運動の時間が定まつて居るのみで外出等は放課後每日爲す事が出來、誠に自由であります、且外出簿などもありませんが些かの間違ひもありません。此れは塾長の生徒を信用さるゝに對し、各自其責任を重んずるからでありませう、又消燈其他の事も生徒自ら推薦せし幹事之をなし、全く自治制になつて居ります。塾長に對しては無論の事舍監に對しても少しも冷やかなる感じを受くる事なく、全く慈母の如くにて、每日出る三時のおやつて不足の時は、舍監室を襲擊しては御菓子の御馳走をねだります。小言も又度々聞くのでありますが却て之が嬉しく聞え、其間柄は殆ど母子の如くであります。それが爲卒業後も屢々塾長や舍監室を訪問致します。舍生の室は一室二人宛になつて居りますが其性質によりて、各々同室の者が定められて居りますので、互ひに性癖も矯正され、其間も至つて親密でありまず。尙掃除などは舍監室及臺所を除き、他は全く不淨場に至るまで生徒の受持ちになつて居ります。是等は全く。當塾の特色であらうと存じます。兎も角、寄宿舍全體に溫かい家庭的の空氣が漲つて居りますので、新入生が始めて入舍致しましても、少しも寂寥とか、孤獨とか云ふ感じを持つ事がないのは私共の誇りとする處でありました。尙終りに一言申して置き度い事は此漲つて居る溫かき空氣に觸れて、今迄は全く眞の神を知らなかつた者が神を知り厚い信仰を得た者が多數で私も其一人であります。

詩第四十六篇

南湖院長　高田畊安

一　神は吾れを各時
守り給はる防禦なり
患難の際の援助なり
確められしことにして

二　されば吾らは恐れじな
假令大地は陷むも
よしや山らは海ばらの
眞中さして倒るとも

三　假令大なるその濤は
鳴り轟くも泡噴くも
其激さに山々を
搖げ擧ぐるに至るとも

〇　全能の主共に在す
吾れを守る堅き城
太祖の神に在すなれ

四　河の枝らの川流
神の都を喜ばす
是ぞ至上者　聖居の
最聖の處なる

五　神其中に住み在せば
都や搖ぐことあらじ
明る朝のあさぼらけ
神ぞ救はせ給ふなる

六　國民ら暴れ狂ひけり
王ある國ら搖ぎけり
神は聖聲を立て給ふ
やがて大地は動れ震ふ

七　全能の主共に在す
吾らを守る堅き城
太祖の神に在すなれ

八　行けよ汝ら而して
主の聖行を見よやかし
そも〳〵彼は地の上に
大なること爲給へり

九　戰爭(たゝかひ)らをば世の中に　周(あまね)く彼は制め給ふ
弓折り槍を切り給ひ　火を以て楯を燒き給ふ
十　汝ら控へ而(そ)して知れ　唯吾のみぞ神たるを
民らの中に崇められ　全地の仰ぐ所たり
十一　全能の主(きみ)共に在す　吾らを守る堅き城
太祖の神に在すなれ

中華の某友へ

森田松榮子

紅十字旗の下
紅顏のきみは砲火をしのぎつゝ、
兵馬倥偬の間に馳驅して、
倒れたるを起し、傷をつゝみ、
憂國の烈士の熱血をして、
徒らに無情の土にそゝがしめざりき。

きみは東に走り西にとび、
その朱唇は大義を說きて止まざりき、
かくして義俠の義は爭て財をさゝげ、
守錢の奴すら財を吝しまざりしままに、
きみによりて革軍へおくられたる、
糧食と軍資とは少なからざりき。

きみはまたよく、
殉國の志士の家庭を歷訪せり、
きみの慰撫に涙をぬぐはれし若き妻等は、
さらにきみの鼓吹によりて、
家長の志をば、
その稚き遺兒に繼がんことを誓ひぬ。

新らしき五色の旗に、
共和の曙光を認めたるきみは、
同性啓發の志切に、
學を先進國に受けんとて、
茫々千里兵火の跡いたましき故鄕を後に、
波濤を蹴りて東へ來りぬ。

きみが遙に憧憬せし先覺の國人等は、
あはれ如何にきみの美しき幻影を碎きしかよ。
外面の模倣に汲々たる生活！
輪奐のみ徒らに美なる帝都！
客窓に紅淚潸として落ちしを、
鄕愁ならざりしとは誰か知らむ。

されどきみがゑらばざりしさきに、
既に己にきみを擇び給ひし神は、
きみを絕望には委ね給はざりき。
物質的文明の都にきみが寂寥の杯を乾したる時、

きみの魂はそれ自らの孤獨に慄へはじめ、
きみの魂は初めてその故郷をもとめて泣きぬ。

形態のみ賑かなる都は、
きみにとりては灰色の沙漠なりき。
されど、隊商に緑なる樹蔭と、
清深なる水を供するオアシズである如く、
きみには少數なりとは云へ、
愛を惜しまざる友なきにあらざりき。

既に祈る友を得てより、
きみの魂の漂泊は長からざりき。
身は他郷に遊子なりしかど、
魂は天文の胸に倚りぬ。
きみは自らを大なる孤獨に陷らしめし、
この都をば祝福するに至れり。

きみは國語と學制の相異より來る困難に
異常の努力と熱心を以て打勝ち、
當時女子として最高の學府の一に學びぬ。
あゝ神よ「主の踪跡は索ね難きかな」
きみが靈の歡喜に醉ひ、眞理の探究に耽れる間に、
主は病をしてきみの健康を奪ふ事をゆるし給へり。

きみが學半にして歸るは惜しむ可し、
きみが病を得たるは傷む可し、
あゝされどきみよ、此國に來りしことを、
不斷に神に感謝せよ。
きみは全世界にも換へがたき、
眞の生命を此處に得たるにあらずや。
共に信仰を語り志を舒べし、
樂しき思出多き學寮のきみの一室に、
あはれ其時いかに暗愁は漲りしかよ。
そは我ら聖主の憫恤の聖手の我等の上にありしは知
れゝど、
されど我等が別離の祈禱には、
涙なきを得ざりければなり。

寒雨寂々たる二月の朝、
無言の握手に無限の思をこめて、
我等が生別せしより既に二年を經たり。
頃日四隣を騁かしたる帝制の聲は、
既に己に共和の第一日に於て、
きみ等が他郷にありて、先見し豫言せる所なり。

聞くきみが故山の男子等は、
既に劍をとりて起てりと。
我は遙にきみがその胸の、
たぎる血汐に筆を浸して、
四川の白雪に淋漓たる紅もて書かんことを希ふ、

「先づ魂の革命のために」と。

（一九一六、二月作）

述懐

高田耕安

あまつかみぬしをみおもふわれ
この世のきよはふもとふく風

吾友へ

同人

はじめなりいかでをはりのなかるべき
きみがおもひにこたへたらめや

早春

辻村靖子

うめの花さきそめしより打ちはえて
春のこさめのしばしば降る

早春井の頭に行きて

同人

水ぬるむ池のさゝやきさゝながら
いたゞき赤し杉のむらだち

聖書研究

以賽亞書（完）

牧師　横田貞治

第六回　第二以賽亞の僕觀（下）

第一說、僕は一人の個人なりと。成程、讀み來れば個人ならんと思はるゝ節々多し、而して、其解釋は、之をイエス、キリストを豫言したのであると云ふが古人に多し、併し第二イザヤの眼中、果して數百年後、ユダヤのベツレヘムに生る、イエスを思ひつゝ、これに見當をつけて豫言せしものが、疑問である。或學者は依つてこれはエレミヤであると云つて居る。實際、エレミヤは餘程苦しみを受けた豫言者であるが、果して此惱める僕の如きであつたろうか、エレミヤ傳を讀めばそうらしくもない。或はゼルバベと云ふ、彼れはバビロンよりイスラヘル人を

つれ歸つた者である。或は先きのユダの王エホヤキンなりとす、併し此の惱める僕の如く理想的のものでない。又は當時居りし、第二イザヤの友人なる敬虔なる學者を指しと云ひしならんと。

第二說、これは個人にあらず、寧ろ國民と云つたものである、國民全體を集合的にして云つたものであると。四十一章八節を見れば、イスラエルをエホバの僕と云つて居る、明らかにイスラエルは國民である。又四十四節、一節、二節にも同じ言葉がある。然らば、エホバの僕はイスラエルにあらずや、殊にエホバの僕をうたへる。第二の詩には、イスラエルと云つて居る。このイスラエルと云ふのは、說明的附加であると云ふが、希臘譯にもあるを以つて、說明的附加としても古きものである事を示す、又第一の詩にも、希臘譯には、ヤコブ、イスラエルと云ふ文字のあるを見る。故に少なくとも、集合的なるの說明は古きものなる事明かなり。且此物を人格化すると云ふ事は、希伯來思想に於て古くより珍らしきものではない。(十二の子と云ふも、これは十二人の子供でない、ヤコブの十二の族であるを見よ。)エゼキエル書三十七二十五、エレミヤ書三十十等にある。確かに古き思想に、種族を人格化 Personify せる處多きを以て、此場合もそうであるとして居る。

其處で、然らば果してこのイスラエルは、現實のイスラエルを云ふか、理想的イスラエルを云ふのであるか、又イスラエルの一部を云ひしか、この三つの內何れを指せるものなるか、この歷史的イスラエル現實のイスラエルであると云ふならば、四十九章に於て「ヤコブを歸らする」とか、イスラエルを集まらする」とか、或は『ヤコブのもろ〳〵の支流をおこす』等の言葉其當を得て居ない。何か此僕の外に歷史的イスラエルがあるかの如く思はしむ。此場合此僕を理想的イスラエルとすれば、或は解釋は容易なり。乃ち僕を初より、エホバの心の中に存在せる理想的イスラエルとす。されどかく取りて困難なる事は、四十九章四章『されど我云へり、我は徒然に

働き、益なくむなしく、力を費しぬと」云々、又、五十章、六節「我は撻つものにわが背を任せ、吾が鬚をぬくものにわが頰を任せ、耻と唾とをさくるために面をおほことをせざりき」又、五十三章一節—九節等に於ては、其僕は既に歷史上の經驗あるを經て來れる者の如し。故に此等の困難をさくるために、此理想的イスラエルは稍々現實のイスラエルの內の一部によつて實現されつゝあり、神の國は未だ實現されて居らぬが、其一部は吾々の內に實現されて居ると同じで、この理想的イスラエルが、現實のイスラエルに一部あらはれてをるとするが最無難なり、兎角いづれにしても、多少の困難は免からないが、神の僕、罪なくして、他の罪のために苦しむとは實に偉大なる思想である。

此處に第一に何故義人苦しむかの問題が起るが、之に一つの解決を與へて居る。昔よりイスラエルは神の選民なる事を自覺し、其理想は世界の征服にあり、必ず高く擧げらるゝと自信して居つたが、されど歷史の事實は如何？　イスラエル程苦難の歷史を持つて居るものは少ない、成程イスラエルにも罪がないではない、而して其罪が、此刑罰を受くるにせよ、イスラエルを亡ぼし天下を取れる勢ある、シリヤ、バビロンを見よ、尙罪を犯し、尙神を知らず、又兇暴を極めて居る、然かもこれに比較すれば罪なき、且唯一の神を知る點に於て、彼等に數等優れるのイスラエル、彼等の爲に亡ぶるは之れ如何？　何故義人が苦しめらるゝか、此疑問は既に紀元前六百年頃の豫言者、ハバククによりて上げられて居る。（ハバクク書一章、一節）「エホバよ我呼はるに汝の我に聽きたまはざる事、何時までぞや、我汝に向いて强暴を訴れども、汝は助けたまはざるなり、汝何とて我に害惡を見せたまふや、何とて艱難を眺め居たまふや、奪掠及强暴わが前に行はる、且爭論あり、鬪諍おこる、是によりて律法弛み、公義正しく行はれず、惡き者、義しき者を圍むが故に公義曲りて行はる。」惡しき者はアッシリヤを云ひしなるべく、

義しき者はユダヤの民を云ひしか、此不平に對し、エホバはカルデヤ(バビロン)を遣りて彼等を罰せしめんと云ふ、然るに何んぞバビロンはアッスリヤよりも横暴ならずや、ババククは豫言の塔に上りて神に其説明を催促した、乃ち『汝は目清くして肯へて惡を觀給はざる者、肯へて不義を視たまはざる者なるに何故邪曲の者を觀捨て置き給ふや、惡き者の己にまさりて義しき者を呑噬ふに、何故汝、默したまうや』と、然し、ユダヤの民バビロンに捕はれて又起たず、天よりの救は何等來るの樣子なし、斯くして遂に神の民は亡ぶにや、殊に其中に眞の義人もあるに於ては之れ如何、義人何故苦しむやは實にイスラエルの民に取りて、長年の懸案であつて、其解決に苦しんだ、そして其解釋には義しきものは信仰によつて生くべし、と云ふ結論に達して居る。彼のヨブ記は一つは其結果の產物であらう、此れが解決のために書かれたものであると云はれて居る。

此第二イザヤの解釋によつては、義人なるが故、乃ち神の僕なるが故に萬民のために苦しむなりと云つて居る、イスラエルは萬民のために苦しんで居るが、この苦しみ、賤められし民が恢復せられて、萬民はイスラエルをあがめ、其苦しみし所以を明らかにして、自然萬民の內に罪の觀念起り、心よりイスラエルの民の苦難の精神的意味を了解するに至らん故に義人の苦難は樂觀すべきで、神の大なる目的は之れによりて果さるゝのであるから、寧ろ光榮とし感謝すべきである。

第二に、メシヤの代理的受難の思想である。理想的神の僕は、直ちに世界の征服者ではない、天下の帝王ではない、見彩えなき人である、柔和にして其聲聞えず、悲の人、惱みの人、又遂に恥かしめられて死ぬるの人である。

第二イザヤは之をメシヤ受膏者とは云はず、又エホバの惱める僕をメシヤとは云はぬ、然し、我々の立場から、之をメシヤと云つて居る。彼れは王でない、理想的僕である。之を豫言者第一イザヤの理想

的王と比較して、其出發點大いに異るを見る。吾々はイエスキリストによりて此兩者、乃ち王であり、僕である、メシヤの結び付けられしを見るのである此兩者の思想偉大なるを感ずれば感ずる程、此兩者を體得して餘りある、イエスの絕對である事を思はざるを得ない。

斯く第一イザヤ、第二イザヤは歷史上のイエスを思ひて豫言をなせしにはあらざるも、イエスは實に此等の豫言を、身に全うせしを見る、而して自然と預言せし事になつて居る。彼は十字架上に苦みを受け、然かも萬民を救はんが爲め、其血を流し肉を裂き給ふた、而して『我世に勝てり』と云つて今や世界を精神的に征服しつゝある。眞の帝王である。シーザーは亡び、ナポレオンは逝く、されど永遠にイエスの御坐は高く上げらるゝのである。(完)

彙報

○夏季修養會委員會

三月十日午後四時より神田區北神保町日本基督教女子青年會本部事務室に於て本年度夏期修養會委員會を開く出席者は小此木松子、星野愛子、小池實惠、松宮信子、ミスレーガン、松宮信子、河口正子にて、小此木委員長會を司どり、本年の夏期修養會の場所及其時日等を相談せしが、懇談に終りて決定に至らず再會を期して協議を重ぬる事とし、次に同修養會に於ける講師及聖書の組擔任教師依賴につき協議し、大略左の諸氏に依賴せんと決定せり。

教師　城戸　順子　石原　謙氏　外村義郎氏
　　　稻　垣氏
講師　山室軍平氏　植村正久氏　廣岡　淺子
　　　外村義郎氏　今井壽道氏　稻　垣氏
　　　平　岩氏

○東京基督教女子青年會　▲女子傳道講演●●●●●●

會　三月五日(日曜日)午後三時より女子傳道講演會を開きバプテスト敎會牧師今井革氏の「予が基督信者となりし理由」と題して有益にして力ある講演ありき。來會者五十餘名、小集會なりしも其內に多數の未知の人を見受け、好集會なりしを感謝す。閉會後今井氏に質問をなすものもありたり。

▲**敎育部委員會**　本會事業の發展を圖り、なほ多くの要求に應じたき目的を以て、敎育部に委員を置くことゝし、東京靑年會委員中より中川眞砂姉を擧げて委員長に、石川靜子、小此木武子、小池實惠子、河口正子、松宮信子、富澤美穗子、芳野淺子の諸姉を委員とし。三月十三日第一回委員會を開き、現在の狀況及事業等の報告ありてより諸要件を協議したり。

▲**女中慰勞會**　會員會友の諸家庭に働ける女中方を招きて、四月五日(水曜日)午後七時より女中慰勞會を開かん計畫にて目下準備中なり。多數の姉妹方の臨席をも歡迎す。

▲**新聖書の組**　小石川豐島岡敎會牧師横田貞治氏擔任にて、四月第二金曜日午後三時半より開催す科程は新約聖書講義にて組織的研究なれば有志の姉妹は振つて來會せられんことを希望す。

▲**英語の組**　ミス、イーストレーキ擔任の英語の組は春休みもなく、熱心に勉强せらる。夜の組は未だ滿員に至らず尙多くの缺員あれば、入會志望の方は申込ありたし。

▲**體操の組**　追々日本人の數を增加し來れり。

▲**會員の募集**　本會入會者は漸次增加しつゝあるも尙本年中に二百名以上の新會員を得たき意氣込みなれば既に會員たる諸姉が博く本會を御紹介頂きたく其御努力を乞ふ。

○**遺愛女學校靑年會**　去る二月二十七日の萬國基督敎靑年會の學生祈禱日は當靑年會にても之を守る。其大略は左の如し、午前で時より十時まで各級別に主任敎師の司會の下に祈禱會を開き、同十時より十一時半まで、本校講堂に於て全校生徒のため

に集會を開き當校の御滯在の吉田とみ子先生より、「十字架」と云ふ題目にて有益なる御話を伺ひ、一同喜びに充ちて散ぜり、出席者凡そ百名。午後一時より二時半まで各部(宗教、社交傳道及びドルカスに相分れ各部委員長司會にて祈禱會を開く、午後七時より八時まで吉田とみ子先生の司會にて祈禱會を開きたり、其時多くの生徒の切なる祈に吾等一同聖火にうたる。この日は終日青年會の會員は祈りの中に淸く送り、大いに得る處ありき。

二月第一木曜日に大正五年度の役員選擧會を開く結果左の如し。

會長　安齋とみへ　副會長　鷲巣とき
會計　西村ゆき　書記(記錄)　今ひで子
通信　浦田みよ　宗教部委員長　堀順子
傳道部委員長　ミス、フレッツ　社交部委員長　西村ゆき
ドルカス　鷲巣とき

○東洋英和女學校青年會　本校女子青年會が呱々の聲を上げて茲に一歲、天祐によりて聊かなし得たる處を左に御報申上候。大正四年二月四日を以て、本會の設立日とし、同月中本會憲法第八ヶ條を選定し同月十七日役員の選擧を行ひ、三月四日發會式を擧行し、爾來每週水曜日に本會主催の集會をなせり。●●會計は全收入、金高壹百九拾六圓〇參錢也全出金、總額壹百八拾四圓九拾參錢也、差引現在金として新會計に引繼ぎたる金額は拾壹圓拾錢〇五厘也。其の出金の主なるものは寄附金にて左の如し。

金拾圓也青年會本部へ　金拾圓也支那傳道のため　金拾圓也日曜學校へ　金參圓也永坂孤女院へ　金五圓也熊本癩病々院へ　金五圓也　救世軍肺病々院へ　金五圓也仙臺孤兒院へ　金七圓也目黑病院へ　金五圓也本部事務所へ　金貳拾壹圓也學資補助として一生徒へ　金四拾四圓也夏期修養會への代員のため　金八圓八拾錢也講師へ謝禮

▲次に仕事會を開き、裁縫編物等のために每月第二第四の金曜日に午後七時より九時迄とし、會員の手になりし物品は主に、三回のバザーによりて賣捌き利益、金九拾八圓九拾貳錢五厘を得たり、又販賣部は午前七時半より八時迄、午後は零時半より一時迄開店し、生徒日用品を賣捌けり、賣上高總額、金六百八拾九圓九拾錢五厘。支拂高總額、金六百參拾參

圓六拾壹錢五厘、純利益合計、金五拾六圓貳拾九錢也。又諸集會は集會、(1)例會は毎月第一の水曜日午後に於て行へり、回數八回とす、(2)社交部は集會數五回左の如し、A卒業生送別會一回、B新入學生歡迎會一回、C誕生日會三回とす。(3)矯風部、(4)祈禱部、(5)傳導部等、集會併せて廿二回とす。就中校外より講師を招聘せる事、五回にして他は本校職員、或は生徒司會の勞をとる、校外より招聘せし講師は芝敎會牧師　今井壽氏　早稻田大學敎授哲學博士高杉龍藏氏、聖マリマ館舍監　長谷川喜多子氏、靑山學院敎授　ミスター、デビソン、　矯風會少年禁酒軍部長　守屋東子氏なり、又毎月の集會の外校內少年禁酒軍を補佐、監督し毎月一回矯風禁酒等に關する有益なる訓話をなせり。其他本校職員、卒業生及生徒の慶事、不幸、疾病等の際に音信慰問の任に當れり、其音信數廿六回、尙祈禱部は毎日曜日午後三時半より同四時迄祈禱會を開けり。此他靑年會主催にて毎日曜日夕食後に祈禱會を開き會員其他有志者の祈禱感話などをなして修養を計れり。又年來王女會が所持せし投書箱及誕生箱を讓り受けて、本會に於て同樣の目的のために用ふる事となせり。先年中入函せし誕生日感謝金、合計五圓拾六錢也、右は大正四年クリスマスに日曜學校贈物のために寄附す。現在會員數四十八名、內正會員卅八名、準會員十名也。大正五年二月役員の改選をなす、結果は左の如し。

會長	內田勝代	副會長	山田森々代
書記	田邊芳子	會計	戶田島子
販賣部長	佐藤竹次	仕事部長	高木君子
矯風部長	本多靜子	傳道部長	內田茂登
祈禱部長	柳澤俊子	社交部長	山脇三枝

○サクラメント女子靑年會

創立以來既に二年餘を經過し、會員は增減あり、現在會員數三十六名、當市內居留同胞人口は千五百を出入し婦人は其三分の一位なるべし、故に本會々員數は全婦人數の十分の一にも達せずと雖も、最も健全なる敎育ある分子を網羅せり、事業としては現今長老敎會內の

事務所に於て英語を教授しつゝあり、昨年度に於て春夏二回の音樂會を催ふし市内大部の來聽者あり、御即位式紀念章を約四百五十個分配し、又病者を訪問し、人事の幹旋を爲し地方散在の會員會友と連絡を結び米人女子青年會と常に往復し氣脈を通じ親交を計りつゝあり、昨年度の會計は總收入金高百四十八弗、支出金百三弗本年二月十八日其の總會を事務所に開きたるに會する者十八名青木夫人司會し赤堀夫人聖書を讀み宗夫人は祈禱後事務に移れり、本會には長々なく中村、宮川、赤堀の三夫人幹事として盡力せしが、宮川氏は一時歸朝し且改選期なるを以て改選せし結果、柴、赤堀、青木の三夫人に依頼することゝなり、又評議員としては北、野尻、島田、阿部、杉山の六夫人に依頼することゝなれり。

消息

○志立たき子夫人　今回女子青年會本部中央委員に選擧す。

○世良田勇子　今回大槻愛子姉に代りて好友園主任とならる、同姉は上田町梅花幼稚園保姆傳習所出身なり。

○永野睦子　三月十五日中島氏と結婚。

○古谷たまき　上田町梅花幼稚園保姆傳習所出身なる同姉は今回好友園を助けらる。

○田丸よね子　福島縣川俣女子青年會休養所主任なる同姉は二月中旬上京加藤病院に入院の處三月中旬全快歸郷せらる。

○鈴木良子　横濱フエリス女學校出身にて今回横濱青年會に働かる

○湯田きみの　本部事務所を助けられし同姉は三月末日辭任。

○河口正子　本部事務員を辭されしが今回府下瀧ノ川女子聖學院に奉職。

○松宮信子　女子英學塾出身の同姉は本部事務員に就任。

○會友申込（本部報告）

（普通）　高村高子　上野とし子　山田きよの　岡田榮子

（維持）　竹中久子

○會友會費領收（本部報告）

金壹圓也

ミス・ハート（四ノ十一―五ノ十）　三島津奈（五ノ三―六ノ二）

高村高子（五ノ三―六ノ二）　石塚忍子（五ノ五―六ノ四）

松田縫子（五ノ二―六ノ一）

金貳圓也
ミス、コルテス（五ノ二―六ノ一） 竹中久子（五ノ三―六ノ二）

〇雑誌「女子青年界」代金領收

金七拾錢也
高橋まさ（四ノ五―五ノ四） 竹尾けい（四ノ五―五ノ四）
宮地芳子（四ノ三―五ノ二） ミセスボウルス（四ノ三―五ノ二）
ミセス、パーピス（四ノ一―十二） ミセス、ピンセント（四ノ三―五ノ二）
納戸町寄宿舎（四ノ一―十二） 女子神學校（四ノ一―十二）
龜岡すみ（四ノ一―十二） バプテスト女子學寮（五ノ二―六ノ一）
伊東春吉（四ノ四―五ノ三） 花井喜代（四ノ四―五ノ三）
岡村イセノ（五ノ三―六ノ二） 平賀みよ（五ノ三―六ノ二）
渡部トク（同上） 籏本とみ（同上）
山宮とよ（同上） 佐久間ヨシ（同上）
八島いね（同上） 佐藤しう（同上）
小野ゆう（同上） 上村こう（同上）
須永ふく（五ノ一―十二） 代田初子（四ノ七―五ノ六）
長島幸代（四ノ四―五ノ三） 河合柳子（四ノ五―五ノ四）
上代淑子（五ノ三―六ノ二） 上野久米（五ノ一―十二）
金矢テフ（四ノ一―十二） 濱口カツ（五ノ三―六ノ二）
中島操子（四ノ五―五ノ四） 中村高子（四ノ一―十二）
石井きみ（四ノ一―四ノ十二） 馬詰京子（四ノ四―五ノ三）
甑關くら（四ノ四―五ノ三） ミス、ドレパー（四ノ一―四ノ十二）
富尾光子（四ノ四―五ノ三） 高梨チセ（四ノ三―五ノ二）

伊藤トミ（四ノ四―五ノ三）
金七拾壹錢也 鈴木シノ（五ノ三―六ノ二）
金壹圓〇五錢也
藤田きみ（三ノ三―五ノ四） ミスドーテー（三ノ十―五ノ二）
林あき子（三ノ十二―五ノ四） ミス、モニク（三ノ十一―五ノ三）
杉山孝子（三ノ十二―五ノ四）
金壹圓五拾錢也
石井光子（四ノ一―六ノ一） 中村玉子（四ノ十二及五ノ一各十部）
金壹圓四拾錢也
秋田文子（四ノ一―五ノ十二） 玉置伍子（四ノ一―五ノ十二）
日本女學校（三ノ一―五ノ三） ミス、コルテス（五ノ三―六ノ二部宛）
ミス、スミス（四ノ一―十二二部宛）
金參圓五拾錢也 多田貴子（四ノ五―五ノ四五部宛）
金參圓〇八錢也 高折かなゑ（五ノ一―五ノ二二十四部）
金參圓九拾貳錢也 共立女學校（五ノ一五十六部）
金參拾五錢也 土生よしの（四ノ十一―五ノ三）

大正五年三月廿八日印刷納本
大正五年四月一日發行

發行所 東京市神田區北神保町十四番地 日本基督教女子青年會
編輯兼發行人 東京市神田區北神保町十四番地 河井道子
印刷人 東京市芝區櫻田和泉町七番地 前川吉治郎
印刷所 東京市芝區櫻田和泉町七番地 三成舍

ness at home, and 24 running away from the rigors of factory life. In addition to these women who stayed for a period of time, several hundred were given help in other ways, such as advice, guidance to their destinations, help in baggage, etc.

During the last year three women have given their full time to the work, and they have met practically all the through trains at Ueno and Central stations. In the Spring, through the courtesy of the Railroad officials, a room was granted to the Association for Traveler's Aid work at the exit of the new Central station, and it has been a great help in giving the matron a place in which she could confer with women who needed her assistance. The little Traveler's Aid house is a small house in which two of the matrons live, where they can keep two or three girls at a time. It has been found absolutely necessary to have such a place in order to do effective work. The matrons will be glad to meet any girls coming to Tokyo alone, if they are notified of the time of arrival beforehand, and will cooperate in any way they can to help them. The address of the Traveler's Aid house is 24 Tenjinmachi, Yushima, Hongo, or letters may be sent in English or Japanese to the Association headquarters, 14 Kita Jimbocho, Kanda.

As this work involves considerable expense each month, the YWCA is also asking those who are interested to cooperate in giving something toward its support, and that it may be more firmly established, annual gifts will be especially appreciated. Such gifts may also be sent to the Association at the above address.

NATIONAL COMMITTEE

Headquarters: 14 Kitajimbocho, Kanda, Tokyo.

Telephones: Residence, Bancho 4563; Office, Honkyoku 598.

Cable and telegraph address, Emissarius, Tokyo.

Furikae chokin, Tokyo 23723.

Mrs. Hana Ibuka, Chairman
Dr. Kei Okami, Vice-chairman
Miss Tami Mitani, Secretary
Dr. Tomo Inoue, Treasurer
Miss Michi Kawai, Active Member World's Committee
Miss Ume Tsuda
Miss A. B. West
Miss Uta Suzuki
Miss Kita Hasegawa
Miss Sarah Ellis
Miss Chiyo Yamada
Mrs. E. W. Clement
Miss Ai Hoshino
Miss Jun Kido
Miss Matsu Okonogi
Mrs. Taki Shidachi

NON-RESIDENT MEMBERS

Madame Asa Hirooka, Osaka
Mrs. Koito Saiki, Kyoto
Miss M. F. Denton, Kyoto
Miss Michi Matsuda, Kyoto
Miss Yoshi Kajiro, Okayama
Miss K. Tristram, Osaka
Miss Susan Searle, Kobe

SECRETARIES

Miss Michi Kawai, National
Miss Margaret Matthew, National
Miss Ruth Ragan, National Office
Miss Mary Page, General, Tokyo
Miss Taka Kato, General, Tokyo
Miss Emma Kaufman, Associate, Tokyo
Miss Mary Baker, General, Yokohama

THE YOUNG WOMEN OF JAPAN

(Joshi Seinen Kai)

VOLUME XIII MARCH, 1916 NUMBER 4

REPORT OF TRAVELER'S AID, TOKYO YWCA, 1916,

Toward the close of 1915, two girls came to the YWCA Traveler's Aid matron at the new Tokyo station with a story that immediately called for sympathy and help. Two weeks before they had been in their home in a country village, and a man and a woman who had formerly been residents there came back to visit and engaged their services as maids in their home in Tokyo. This couple declared that their fortunes had been made since leaving the country and that they had just built themselves a new home, for which they needed the services of seven maids. These two girls were among the seven taken. When they reached Tokyo, they were taken to a house and imprisoned instead of being given work. There seemed to be no way of escape, but after a time these two jumped from a second story window and went to the station where they found the YWCA worker. After hearing their story, the matron conferred with the police and sent the girls to the Traveler's Aid house of the Association. It was two weeks before the police could locate the house where the remaining five girls were, for the two who escaped were unfamiliar with Tokyo and could not give adequate directions. After a time, however, they were all rescued and sent back to their homes, and the man and woman received the punishment they deserved.

Early in the year 1915, three girls of 17, 18, and 19 were seen to be lingering around Ueno Station after the other passengers from the northern train had gone their various ways. When questioned, they said that they were on their way to visit an aunt in Shiba, but further talk revealed the fact that they knew no one in Tokyo and had run away from a factory in the north. They said that the factory work had become so difficult and distasteful to them that they had decided to leave, and they had taken advantage of a snowstorm to run away at that time, as it would be the more difficult to follow them. After walking several miles in the storm, they had spent the remainder of the night in a small temple and had proceeded to Tokyo on the following day. These girls were likewise sheltered in the Traveler's Aid house and were afterwards settled in positions as maids in Tokyo homes. Such causes as these are the reason for the need of Traveler's Aid work in city stations.

Just two years ago the Tokyo YWCA undertook this work and it is now being carried on in Ueno and the new Central station. During the last year 135 girls and women, 85 of them between the ages of 15 and 20, were cared for, for periods varying from one night to two weeks in the Association Traveler's Aid house. Of this number, 75 were placed in situations as maids, and as each place was personally investigated, and the guardians of each girl were consulted beforehand, considerable time and effort were required to accomplish it. The remaining 60 were for the most part sent home, to friends, or to some institution where they would receive care. A large proportion of these were runaways, so that the correspondence involved in settling their affairs was considerable. In investigating the records as to their reasons for their coming to Tokyo, it was found that there were three main causes—32 coming for work, 32 trying to escape some unpleasant-

日本基督教女子青年會

目的

日本全國の諸學校及び市邑に於ける青年女子の間に基督教女子青年會を設立し其一致聯合を圖り以て萬國基督教女子青年會と連絡する事

左の事項を奬勵す

青年女子の間に基督教的智識を普及し之を導き基督耶蘇を救主として信奉せしむる事

青年女子の靈的生命を涵養し献身的行爲を勵し其智識社交身體の發達を圖る事

青年女子をして萬國に基督の王國を擴張せしむる事

會友

基督教女子青年會未設の地或は學校に於て本會の主旨を賛助し事業を奬勵せんと欲する者を以て本會の會友とす

會友の種類及會費は左の如し

通常　年　金壹圓　維持　年　金貳圓以上

會友には本會機關雜誌「女子青年界」を送附す

會友たらんと欲する者は本會本部に申出べし

事業一班

巡廻訪問　本會幹事を派遣して支部を奬勵し或は地方を巡廻視察し本會の發展を圖る

出張講演　廣く一般女子の需に應じて講師を派遣す

機關雜誌　月刊「女子青年界」を發行し靈性智識の資に供す

紹介部　一般女子のため諸般の紹介をなす

寄宿舍　東京市内に青年女子の爲監督寄宿舍を設く將來他の都市にも設立せん事を期す

宿泊所　外國婦人の要求に應じ併て日本の眞相を紹介す

夏季修養會　毎年夏季山水明媚の勝地に開會し專ら女子の修養を圖る

旅行者の友　地方より上京する婦女子の保護を要する者の救濟保護に任ず

社會部　所屬幼稚園有り主として下級社會の幼兒を收容し且其家庭の傳道啓導につとむ

中央委員

委員長　井深花子

副委員長　岡見惠子

記錄書記　三谷民子

會計　井上友子

萬國基督教女子青年會同盟委員　河井道子

委員

津田梅子（東京）

エ、ピ、ウエスト（東京）

鈴木歌子（東京）

小此木松子（東京）

長谷川喜多子（東京）

星野愛子（東京）

サラ、エリス（東京）

イ、クレメント（東京）

山田千代子（横濱）

藤田貞子（横濱）

城戸順子（横濱）

廣岡淺子（大阪）

ケー、トリストラム（大阪）

エム、エフ、デントン（京都）

佐伯小糸（京都）

松田道子（京都）

エス、ソール（神戸）

上代淑子（岡山）

役員

總幹事（本部）
同（同）
書記（同）
總幹事（東京）
同（同）
特志幹事（同）
幹事（横濱）
事務員本部
事務員（東京）
事務員（横濱）
旅行者の友係
幼稚園主任保姆
幼稚園助手
第一寄宿舍監
第二寄宿舍監
第三寄宿舍監
宿泊所取締

河井道子
エム、エル、マシウ
アール、レーガン
エム、ペーヂ
加藤高子
イー、アル、カウフマン
エム、ベーカー
河口正子
湯田みの子
大谷久子
伊藤菊子
林ふさ
大崎滿喜
永槻愛子
門野睦子
大倉ふじ
大西絹子
有田玉子
ミス ダルトン

東京市神田區北神保町十四番地

日本基督教女子青年會本部

女子青年界第拾參卷第四號

大正五年三月廿八日印刷納本 大正五年四月一日發行 明治卅七年五月七日第三種郵便物認可